熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

前　中　西　遺　跡

1999

埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会

熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

前中西遺跡

（まえなかにしいせき）

1999

埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会

序

私たちの郷土、熊谷市には、私たちの祖先が営々と築いてきた、文化の証である埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財が豊かに保存・伝承されてきております。こうした文化財は、地域の歴史・文化を今日に伝えるばかりでなく、地域の個性の一部とも言うべきものであり、今日における熊谷市の発展やその過程を雄弁に物語っていると申せましょう。ともすると、私たちは安全で快適な生活の実現に性急なあまり、私たちを育んできた地域の文化遺産のありがたさを見失いがちですが、私たちは、地域全体でこうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の形成のための礎としていかなければならないと考えているところでございます。

さて、前中西遺跡は熊谷市末広四丁目他に所在する弥生時代から平安時代の遺跡であります。熊谷市の上之土地区画整理事業に先立つ試掘調査・発掘調査によってその遺跡の存在は知られるところでありました。そしてこの度この遺跡の範囲内に大和ハウス工業株式會社によって共同住宅建設の計画がもちあがりました。そこで、熊谷市教育委員会は開発業者側と遺跡の保護と保存の方法につき慎重に協議を重ねてまいりましたが、どうしても破壊を受ける部分に関しては記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、急遽熊谷市前中西遺跡調査会を設立し発掘調査を実施いたしたところでございます。

本書は、平成10年８月から９月に実施された発掘調査の成果をまとめたものでございます。

本書を、埋蔵文化財保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご指導、ご協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、大和ハウス工業株式會社埼玉支店、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

熊谷市前中西遺跡調査会
会　長　**飯　塚　誠一郎**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市末広四丁目2501番７他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59－107）の発掘調査報告書である。

2　遺跡名の略号はＭＮＮ（ＤＷ）である。

3　本調査は、共同住宅建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市前中西遺跡調査会が実施した。

4　本事業の組織は、Ｉ章のとおりである。

5　発掘調査期間は、平成10年８月17日～平成10年９月16日である。
　整理・報告書作成期間は、平成10年10月１日～平成11年３月31日である。

6　発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会吉野　健が、本書の執筆・編集は、吉野　健が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課職員の支援を受けた。

7　発掘調査及び遺物の写真撮影は、吉野　健が行った。

8　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

9　発掘調査及び整理作業の参加者は、以下のとおりである（敬称略、五十音順）。
　天沼由起子、池田文江、金子晴美、佐藤春江、杉崎君江、鈴木千豆子、関根愛子、松沢正子、山田実、山本綾子、龍前幸子

10　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。
（五十音順）
　大里郡市文化財担当者会、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

凡　例

1　本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

ＳＸ・・・竪穴遺構、ＳＫ・・・土坑、Ｐ・・・ピット、ＳＤ・・・溝跡

2　各遺構の番号は、整理作業の段階で変更した。ただし、一部は発掘調査時に付したものを用いた。新旧対照表については、第１表に示した。

3　土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

Ｓ・・・川原石、Ｐ・・・土器

4　遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図・・・１／200、遺物分布図・・・１／40、竪穴遺構・土坑・ピット・溝跡・・・１／60

5　遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、すべて24.200mに統一した。

6　遺物実測図の縮尺は、すべて１／４である。

7　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、土師器の断面は白抜き、須恵器の断面は黒塗り、スクリーントーンは赤色土器を示している。

8　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cmである。また、推定値は括弧付けで示した。

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし最も近似した色相を示した。

第１表　遺構番号新旧対照表（左：新番号、右：旧番号）

竪穴遺構		土　坑		ピット				溝　跡	
						14	10		
						15	6		
1	1	1	3	1	24	16	4	1	1
2	2	2	2	2	22	17	5		
3	3	3	1	3	23	18	3		
4	4	4	SX05	4	20	19	2		
5	6	5	SX07	5	19	20	8		
6	9	6	SX08	6	18	21	7		
				7	17	22	9		
				8	16	23	21		
				9	15	24	27		
				10	12	25	26		
				11	11	26	25		
				12	14	27	1		
				13	13				

目　次

序……Ⅰ
例　言……Ⅱ
凡　例……Ⅲ
目　次……Ⅳ
挿図目次……Ⅴ
表 目 次……Ⅴ
図版目次……Ⅴ

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……2
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……9
　1　調査の方法……9
　2　検出された遺構と遺物……9
Ⅳ　遺構と遺物……9
　1　竪穴遺構……9
　2　土坑……22
　3　ピット……25
　4　溝跡……31
　5　グリッド出土遺物……38
Ⅴ　調査のまとめ……43

挿　図　目　次

第１図　埼玉県の地形……3
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　前中西遺跡範囲図……10
第４図　前中西遺跡位置図……11
第５図　前中西遺跡全測図……12
第６図　第１号竪穴遺構、第１号土坑……13
第７図　第１号竪穴遺構遺物分布図……14
第８図　第２～５号竪穴遺構、第４・５号土坑…15
第９図　第２～５号竪穴遺構、第４・５号土坑遺物分布図……16
第10図　第６号竪穴遺構、第６号土坑、第24～26号ピット　……17
第11図　第６号竪穴遺構、第６号土坑遺物分布図……17
第12図　第１～４号竪穴遺構出土遺物……18
第13図　第４・６号竪穴遺構出土遺物……19
第14図　第２・３号土坑……23
第15図　第４～６号土坑出土遺物……24
第16図　第１～14号ピット……26
第17図　第15～23・27号ピット……27
第18図　第11・16・18号ピット出土遺物……30
第19図　第１号溝跡……31
第20図　第１号溝跡遺物分布図……32
第21図　第１号溝跡出土遺物（1）……33
第22図　第１号溝跡出土遺物（2）……34
第23図　第１号溝跡出土遺物（3）……35
第24図　グリッド出土遺物（1）……39
第25図　グリッド出土遺物（2）……40

表　目　次

第１表　遺構新旧対照表……Ⅲ
第２表　第１～４号竪穴遺構出土遺物観察表…19
第３表　第４・６号竪穴遺構出土遺物観察表…21
第４表　土坑出土遺物観察表……24
第５表　ピット一覧表……28
第６表　ピット出土遺物観察表……30
第７表　第１号溝跡出土遺物観察表……35
第８表　グリッド出土遺物観察表……38

図　版　目　次

図版１　前中西遺跡全景（西から）
前中西遺跡全景（東から）
図版２　第１号竪穴遺構、第１号土坑
第１号竪穴遺構遺物出土状況
第２～４号竪穴遺構、第４・５号土坑、第23号ピット
第４号竪穴遺構遺物出土状況
第３・４号竪穴遺構遺物出土状況
第２～４号竪穴遺構、第４・５号土坑遺物出土状況
第２号竪穴遺構紡錘車出土状況
第４号竪穴遺構転用硯出土状況
図版３　第６号竪穴遺構、第６号土坑、第24号ピット
第１号溝跡、第１～３号ピット
第４～13号ピット
第２・３号土坑、第14～22号ピット
第11号ピット遺物出土状況

第16号ピット遺物出土状況
第25・26号ピット
第１号溝跡
図版４　第１号溝跡遺物出土状況
第１号溝跡高坏出土状況
グリッド高坏出土状況
代表土層層序
発掘調査風景
調査区水没状況
図版５　第１号竪穴遺構出土遺物
第２号竪穴遺構出土遺物
第４号竪穴遺構出土遺物
第６号竪穴遺構出土遺物
図版６　第４・６号土坑出土遺物
第11・16・18号ピット出土遺物
第１号溝跡出土遺物
図版７　第１号溝跡出土遺物
図版８　第１号溝跡出土遺物
図版９　グリッド出土遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成10年６月12日、地主棚沢秀男氏から熊谷市教育委員会教育長あてに、熊谷市末広四丁目地内の共同住宅新築工事予定地における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

工事予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「前中西遺跡（№59－107）」にあり、棚沢秀男氏あてに当該地は周知の遺跡が存在する地域のため、事前に埋蔵文化財の詳しい所在を確認するための試掘調査を必要とする旨回答した。

そして、その回答をうけて再び棚沢秀男氏から平成10年６月22日付けで埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査依頼をうけた。そのため、平成10年７月２日に試掘調査を実施したところ、４本の試掘トレンチの全てで、弥生土器、土師器、須恵器が検出されたため、平成10年７月６日付け熊教社収第332号で棚沢秀男氏あてに下記のとおり回答した。

当該地は、現状で保存するか、又は埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましいです。

やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、文化財保護法第57条の２の規定により事前に文化庁へ埋蔵文化財発掘届出を提出し、記録保存のための発掘調査が必要です。

その後、保存策についての協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、一部記録保存の措置を講ずることとなった。

工事主体者である事業主大和ハウス工業株式會社埼玉支店では、工事を９月いっぱいで完了し10月には入居予定であるとのことであった。しかし、折しも熊谷市は４月定例議会が終了し、９月定例議会での９月補正予算の承認を得ても早くて10月からの調査実施という状態にあった。これは事業者に最低でも約３ヶ月の待機とその金利負担等を強いることであった。そこで、熊谷市教育委員会では、すぐに調査に対応できる人的余裕及び発掘関係予算の議会承認時期の二点を勘案して、急遽熊谷市前中西遺跡調査会を設立し、当該事業の待機期間の可能な限りの短縮と事業進捗の妨げの回避に配慮することとなった。そして、平成10年７月28日の役員会の承認を経て熊谷市教育委員会教育長岡嶋一夫（現飯塚誠一郎）を会長に熊谷市前中西遺跡調査会を設立した。

発掘調査は、平成10年８月４日に大和ハウス工業株式會社埼玉支店・熊谷市前中西遺跡調査会間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結し実施することとなった。

発掘調査に先立ち、大和ハウス工業株式會社埼玉支店長から文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が平成10年７月27日付けで提出され、埼玉県教育委員会教育長から平成10年８月25日付け教文３－347号で発掘調査の実施の指示通知があった。そして、熊谷市前中西遺跡調査会長は、文化財保護法第57条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を平成10年８月５日付け熊前遺発第４号で提出し、熊谷市教育委員会はそれを埼玉県教育委員会へ副申を添えて進達した。副申の内容は、共同住宅建物の工事部分は遺構確認面から30cm以上の保護層を設け埋蔵文化財への影響を及ぼさないとの意向が示されたことと、合併処理浄化槽埋設箇所及びその排水管工事箇所については保護層が設けられないので発掘調査が必要な箇所と確認されたことである。さらに、前者については工事立ち会いの指導が適当と思われるとし、後者に関しては部分的な発掘調査が必要と申し添えた。

発掘調査は、平成10年８月17日から開始した。なお、埋蔵文化財の発掘調査についての通知は以下のとおりである。

平成10年８月25日付け　教文第２－93号

2　発掘調査･報告書作成の経過

（1）発掘調査

前中西遺跡の発掘調査は、平成10年８月17日から平成10年９月16日にかけて行われた。調査面積は、共同住宅建設に伴う合併処理浄化槽埋設等によって破壊をうける110㎡であった。共同住宅建物部分も遺跡の範囲内であったが、遺構確認面から30cmの保護層を設ける工法による建築のため、破壊を受けずに保護されるので調査の対象から外した。ただし、その建築にあたっては、工事立ち会いを行った。

平成10年８月18日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、その後遺構確認ための精査を行い、順次遺構の調査に着手した。

途中大雨による調査区の水没や湧水に悩まされ調査は困難を極めたが、平成10年９月16日には調査のすべてを終了した。

（2）整理・報告書作成作業

整理作業は、平成10年10月から開始し、遺物の洗浄・注記・復元を行い、遺構の図面整理作業を開始、12月からは遺物の実測・拓本取りと並行して遺構の最終的な図面整理を行い、平成11年１月には遺物の写真撮影、遺構・遺物図面のトレース、遺構図・遺物図版組を行い、２月下旬には、原稿執筆、割付をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、３月31日に本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者	熊谷市前中西遺跡調査会	
会長	岡嶋一夫	（熊谷市教育委員会教育長、H10.10.6まで）
	飯塚誠一郎	（熊谷市教育委員会教育長、H10.10.9より）
理事	井上善治郎	（熊谷市文化財保護審議会会長）
	石橋桂一	（熊谷市文化財保護審議会委員）
	坂巻　篤	（熊谷市教育委員会教育次長）
監事	大野百樹	（熊谷市文化財保護審議会副会長）
	福島正美	（熊谷市教育委員会総務課長）
事務局長	氏家保男	（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	鈴木敏昭	（熊谷市教育委員会社会教育課副参事）
事務局員	金子正之	（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長）
	吉野　健	（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）

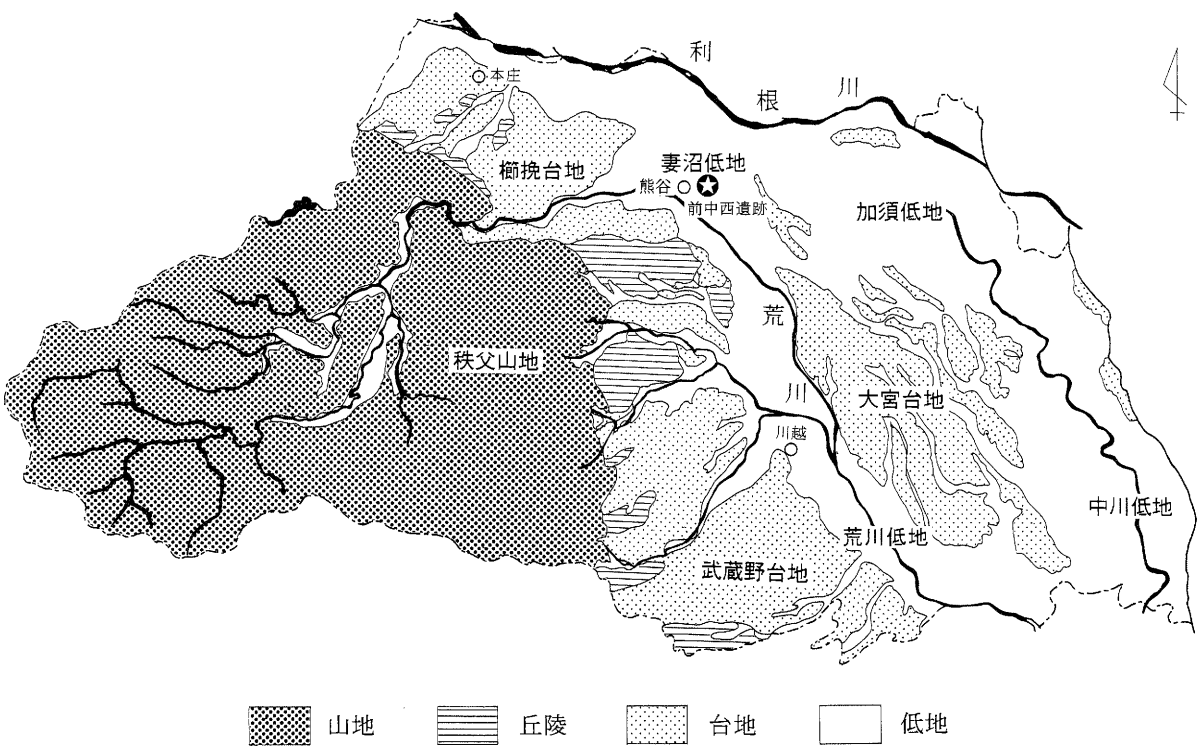
Ⅱ　遺跡の立地と環境

前中西遺跡は、熊谷市末広四丁目2501番７他に所在し、ＪＲ高崎線熊谷駅の北東約1.2km、荒川から北へ約 2.0～2.5km、利根川から南へ約7.0～9.0km に位置する。

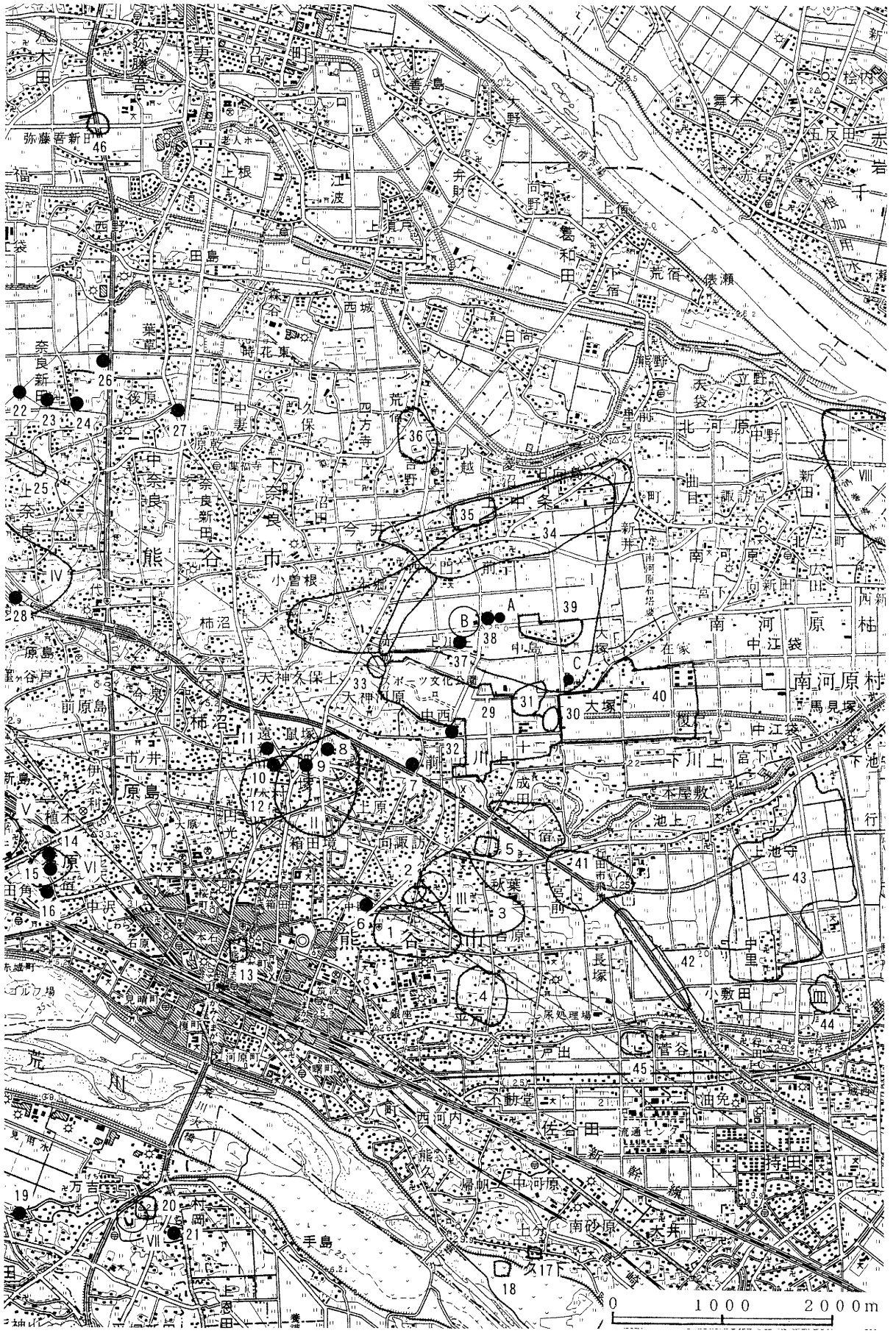
前中西遺跡の所在する末広地区は、熊谷市の中央部付近東にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地にある。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地の荒川左岸側の一帯が、浸食されてできたものである。そして、本遺跡が立地する妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている沖積扇状地の新荒川扇状地（熊谷扇状地）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部上、標高約24mに立地し更地となっていた。現地表から遺構確認面まではおおよそ80cmの厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に主に妻沼低地における歴史的環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例はきわめて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、平安時代の住居跡の覆土中から出土した櫛挽台地上の籠原裏遺跡（地図中未掲載）の黒曜石製の尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、櫛挽台地上さらには妻沼低地上にも発見例が少々増える。妻沼低地上の寺東遺跡（地図中未掲載）では前期関山式土器が、櫛挽台地上の三ヶ尻遺跡内の林遺跡（地図中未掲載）でも前期黒浜式期の集落が発見されている。そして、同じく三ヶ尻遺跡内の天王遺跡（地図中未掲載）では中期から後期の集落が発見されており、妻沼低地には石田遺跡（地図中未掲載）も存在する。後期に至っては、前述の寺東遺跡で称名寺式期の埋甕を伴う土坑



第１図　埼玉県の地形



第２図　周辺遺跡分布図

等が発見されており、豊富な土器群が検出された入川遺跡や深町遺跡（いずれも地図中未掲載）も知られる。また、深谷市の自然堤防上でも発掘調査された中期後葉から後期の遺跡が存在する。このことから、熊谷市だけに限らず深谷市においても妻沼低地の自然堤防上に生活の場を展開していったことが窺える。

一方、縄文時代晩期から弥生時代前半にかけての熊谷市内の発見例はほとんどないが、本遺跡の近辺の北島遺跡で最近発掘調査により縄文時代晩期末から弥生時代中期の土器・石器が出土し、新たな知見となった。また、縄文時代晩期の深谷市の妻沼低地では、前時期の遺跡を継承した位置に再び集落が営まれたようである。

次に熊谷市内において本格的展開の知られる遺跡は、現段階では弥生時代中期まで待つことになる。須和田式期の再葬墓が16基（うち３基は県埋蔵文化財調査事業団平成２年度調査）発見された横間栗遺跡（地図中未掲載）、同じく須和田式期の壺が発見されている三ヶ尻遺跡内の上古遺跡（地図中未掲載）が知られる。再葬墓群や土器を伴う土坑が検出されている遺跡は、深谷市上敷免遺跡・明戸東遺跡、妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡（いずれも地図中未掲載）が知られる。上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土している。そして、本遺跡も当該期の遺跡として知られる。今回の調査区の北側上之地区の土地区画整理事業に伴う発掘調査により、再葬墓と方形周溝墓の２タイプの葬送形態が近接して発見されていて、特異な様相を示している。また、北島遺跡・平戸遺跡・行田市小敷田遺跡も同時期の遺跡として挙げられ、北島遺跡でも再葬墓や土壙墓群が、小敷田遺跡では関東地方で最も古い段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。同時期の集落や住居跡が検出されている遺跡としては、池上遺跡・関下遺跡（地図中未掲載）・飯塚南遺跡が存在し、特に池上遺跡は環濠集落として知られている。そして池上遺跡や小敷田遺跡のような中核的な集落の周辺部に、天神遺跡・平戸遺跡・北島遺跡のような小規模な遺跡が形成されている。後期には妻沼低地の各地に遺跡が見られ始める。明戸東遺跡・妻沼町弥藤吾新田遺跡・中条条里遺跡内の東沢遺跡・行田市池守遺跡が存在する。明戸東遺跡・東沢遺跡・池守遺跡では古ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。これ

第２図掲載遺跡一覧表

１前中西遺跡　２藤之宮遺跡　３諏訪木遺跡　４平戸遺跡　５成田氏館跡　６箱田氏館跡
７河上氏館跡　８八幡上遺跡　９出口上遺跡　10出口下遺跡　11肥塚中島遺跡　12肥塚館跡
13熊谷氏館跡　14天神前遺跡　15兵部裏屋敷跡　16御蔵場跡　17市田氏館跡　18久下氏館跡
19万吉西浦遺跡　20村岡館跡　21北西原遺跡　22中耕地遺跡　23西通遺跡　24東通遺跡
25土用ヶ谷戸遺跡　26横塚山古墳　27奈良東耕地遺跡　28下河原上遺跡　29北島遺跡
30天神東遺跡　31田谷遺跡　32上川上東遺跡　33天神遺跡　34中条遺跡　35中条氏館跡
36光屋敷遺跡　37女塚遺跡　38鎧塚遺跡　39中島遺跡　40中条条里遺跡　41池上遺跡
42小敷田遺跡　43池守遺跡　44星宮皿尾遺跡　45持田藤の宮遺跡　46弥藤吾新田遺跡
Ⅰ中条古墳群　Ａ鎧塚古墳　Ｂ女塚１～６号墳　Ｃ大塚古墳　Ⅱ肥塚古墳群　Ⅲ上之古墳群
Ⅳ玉井古墳群　Ⅴ坪井古墳群　Ⅵ石原古墳群　Ⅶ村岡古墳群　Ⅷ酒巻古墳群

れら弥生時代の遺跡を概観すると、すでにこの時期には低地を利用した積極的な水田経営が行われていたと推測される。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。池上遺跡・池守遺跡・小敷田遺跡・東沢遺跡・天神遺跡・北島遺跡・天神東遺跡・中条遺跡内の雷電塚遺跡・行田市星宮皿尾遺跡・弥藤吾新田遺跡・中耕地遺跡・横間栗遺跡・根絡遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡・深谷市本郷前東遺跡・新田裏遺跡・明戸東遺跡・清水上遺跡（後半８遺跡は地図中に未掲載）等がある。北島遺跡では住居跡が21軒、横間栗遺跡では住居跡が３軒、根絡遺跡では住居跡が13軒検出されており、北島遺跡、根絡遺跡さらには弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。小敷田遺跡では畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土しており、東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られている。また、最新の情報では北島遺跡からも当該期の木製農具が出土していると聞いている。また、雷電塚遺跡では脚部に穿孔のある高坏・器台・Ｓ字状口縁台付甕等が、剣形等の滑石製模造品と伴に出土している。墓域の存在としては、小敷田遺跡・上敷免遺跡・深谷市東川端遺跡（後者２遺跡地図中未掲載）等で方形周溝墓群検出されており、各々17基・９基・５基である。特に東川端遺跡第２号方形周溝墓からはパレススタイルの大型壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・同遺跡内の常光院東遺跡等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出され、把手付大型甑等が出土している。また、集落内の祭祀は東川端遺跡に確認されており、遺物が集中分布している谷にむかう斜面部で剣形の滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に横塚山古墳が存在する。これは、Ｂ種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）である。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地上及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡（地図中未掲載）で古墳時代後期から平安時代の住居跡が90軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上を数える。また同遺跡内の上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出された。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡や三尻中学校遺跡（地図中未掲載）でも後期の集落が検出されている。一方妻沼低地の自然堤防上には、北島遺跡・中島遺跡・光屋敷遺跡・池守遺跡・行田市持田藤の宮遺跡・諏訪木遺跡・一本木前遺跡・東川端遺跡・深谷市新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡・深谷市城北遺跡・飯塚南遺跡等が存在する。北島遺跡では６世紀後半以降集落の規模が拡大し、広範囲に展開した状況が確認されている。また、多量の黒色土器が出土しているほか、いわゆる「比企型」の坏等も搬入されている。中島遺跡・光屋敷遺跡・中条遺跡内の常光院東遺跡等は、いずれも遺跡自体の規模が拡大し奈良・平安時代へと長期にわたって集落が継続する特徴を示している。現在調査中の一本木前遺跡でも後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が60軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、折り重な

るように土師器坏等が出土し、それと伴に臼玉も出土している。

一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。櫛挽台地上の別府古墳群・在家古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群・深谷市木の本古墳群、新荒川扇状地上の玉井古墳群・広瀬古墳群・坪井古墳群・石原古墳群・肥塚古墳群、荒川右岸の段丘堆積層上の村岡古墳群、妻沼低地上の深谷市上増田古墳群・中条古墳群・上之古墳群・行田市酒巻古墳群等が分布する（地図中未掲載も含む)。これらは概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。本遺跡の北に分布する上之古墳群には墳丘の残る古墳が存在し、また土地区画整理事業に伴う試掘調査により多量の円筒埴輪が出土する箇所が確認されており、さらなる古墳の存在の可能性を示している。本遺跡の北西に分布する肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者は荒川水系の石材、後者は利根川水系の石材と判断され非常に興味深い様相を呈している。さらに北には鎧塚古墳・女塚1～6号墳・権現山古墳・大塚古墳等からなる中条古墳群が存在する。鎧塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（県指定文化財）を伴う墓前祭祀跡2ヶ所が確認されている。女塚1号墳もやはり全長46.0mの帆立貝式前方後円墳で二重周溝をもち、盾持ち武人埴輪等の人物埴輪が出土した。築造年代は、前者は5世紀末～6世紀初頭、後者は5世紀末に比定されている。大塚古墳は大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用しており、7世紀前半に比定されている。また東京国立博物館に所蔵されている武人埴輪・馬形埴輪はこの中条古墳群の鹿那祇東古墳からの出土と伝えられている。利根川の右岸に分布する酒巻古墳群の酒巻14号墳では、馬に旗を立てる道具である蛇行状鉄器をつけた馬形埴輪等が出土しており、渡来系の要素が多くみられる。そして、櫛挽台地上の籠原裏古墳群（地図中未掲載）は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相さらには幡羅郡の郡寺的な機能を有するとも考えられている8世紀初頭創建の西別府廃寺（地図中未掲載）という初期寺院との関係においても見逃すことのできない発見である。また、広瀬古墳群中の宮塚古墳（地図中未掲載）は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていく。奈良時代には、この地域も律令制体制に組み込まれていき、低湿地一帯では中条条里・小敷田条里・南河原条里等条里制に関わる遺構の痕跡をとどめている。このころの中心的集落遺跡は北島遺跡にみられる。300軒以上もの住居跡が検出されている大規模集落である。7世紀から9世紀を中心に12世紀さらには中世にまで及ぶ集落であり、大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等様々な遺構と遺物が検出されている。周辺に前述の条里制地域をひかえ地域の中核となる典型的律令制集落である。一方小規模であるが、天神遺跡・中島遺跡・常光院東遺跡・光屋敷遺跡等の遺跡も挙げることができる。さらには7世紀末から8世紀初頭頃の稲の貸付けを記した「出挙」木簡を出土した小敷田遺跡、整然と配された9世紀代の掘立柱建物跡群が検出された池上遺跡も存在する。本遺跡の東には古墳時代後期から平安時代にかけての祭祀が行われた大溝が確認された諏訪木遺跡が存在する。祭祀関連の遺物としては、馬頭骨、管玉・切子玉・勾玉等の玉類、耳環、銅鋺、滑石製の臼玉さらには斎串・人形等が土師器・須恵器・農具等の木製品と伴に出土しており、村（地域）の祭祀である民間祭祀から律

令体制下の祭祀すなわち国家祭祀へと祭祀形態が変化していったことが確認された例として注目される。また平安時代の溝に区画された集落跡や大型の掘立柱建物跡、多数の灰釉陶器が検出されるなど特殊な様相を示す遺跡である。最近、別府条里遺跡が広がる東別府地区の一本木前遺跡で11世紀初頭の住居跡から瑞花鴛鴦八稜鏡が出土し、県内初の住居跡出土例として注目されている。そして、この八稜鏡に関して言えば、北島遺跡の溝跡からも出土例がある。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。中条氏館跡・成田氏館跡・箱田氏館跡・河上氏館跡・肥塚館跡・熊谷氏館跡・兵部裏屋敷跡・市田氏館跡・久下氏館跡・村岡館跡・皿尾城（星宮皿尾遺跡）等であるが、いずれの居館も実態の判明するものはほとんどない。その中で遺構の残りの良いものの中に、中条氏館跡（県指定史跡）がある。中条家長の居館で常光院及びその周辺が当てられており、常光院の境内に土塁の一部と堀を良く残している。この他中条氏関連の遺跡としては、光屋敷遺跡・常光院東遺跡・権現山遺跡等があり、これらは主に中世前半の館跡と考えられている。光屋敷遺跡は、中条氏の祖・中条常光の館跡と伝えられている。発掘調査によって中世の井戸・堀跡・火葬墓等が検出され館跡の存在は確認されたが、出土遺物から室町時代までは遡らせることはできても常光の12世紀前半とは時間的隔たりが大きく、室町時代の館跡が存在したというところまでの確証にとどまっている。また、権現山遺跡は墓地機能をもつ遺跡であるが、元文三年(1738)の常光院由来書に愛童を葬ったという記述があり、その塚は稚子塚と呼ばれ権現山遺跡内にその名を残している。いずれにせよ、中世に関しては資料がまだまだ不足している状態で、今後の資料の蓄積に期待されるところである。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、１辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をＡ－１として南へ１・２・３・・・、東へＡ・Ｂ・Ｃ・・・とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３・・・と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、上記のグリッド設定を行った。なお、座標は国家座標Ⅸ系に基づく基準点測量による。表土剥ぎ後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構も遺物同様必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

2 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、竪穴遺構６基、土坑６基、ピット27基、溝跡１条であった。遺物は、土師器坏・高坏・台付甕・甕・壺、須恵器坏・蓋・瑕・横瓶・甕・転用硯、石製紡錘車、砥石、鉄製品等が出土し、コンテナ５箱分の出土量であった。いずれの遺構も古墳時代後期を中心に古墳時代前期から後期の遺物を出土した。遺構確認面の直上には、約６～10cmの遺物包含層が存在し、古墳時代前期から後期にかけての土師器・須恵器が出土した。

また、調査区の所々に攪乱箇所が確認され、遺構が破壊を受けている箇所が見受けられた。

Ⅳ 遺構と遺物

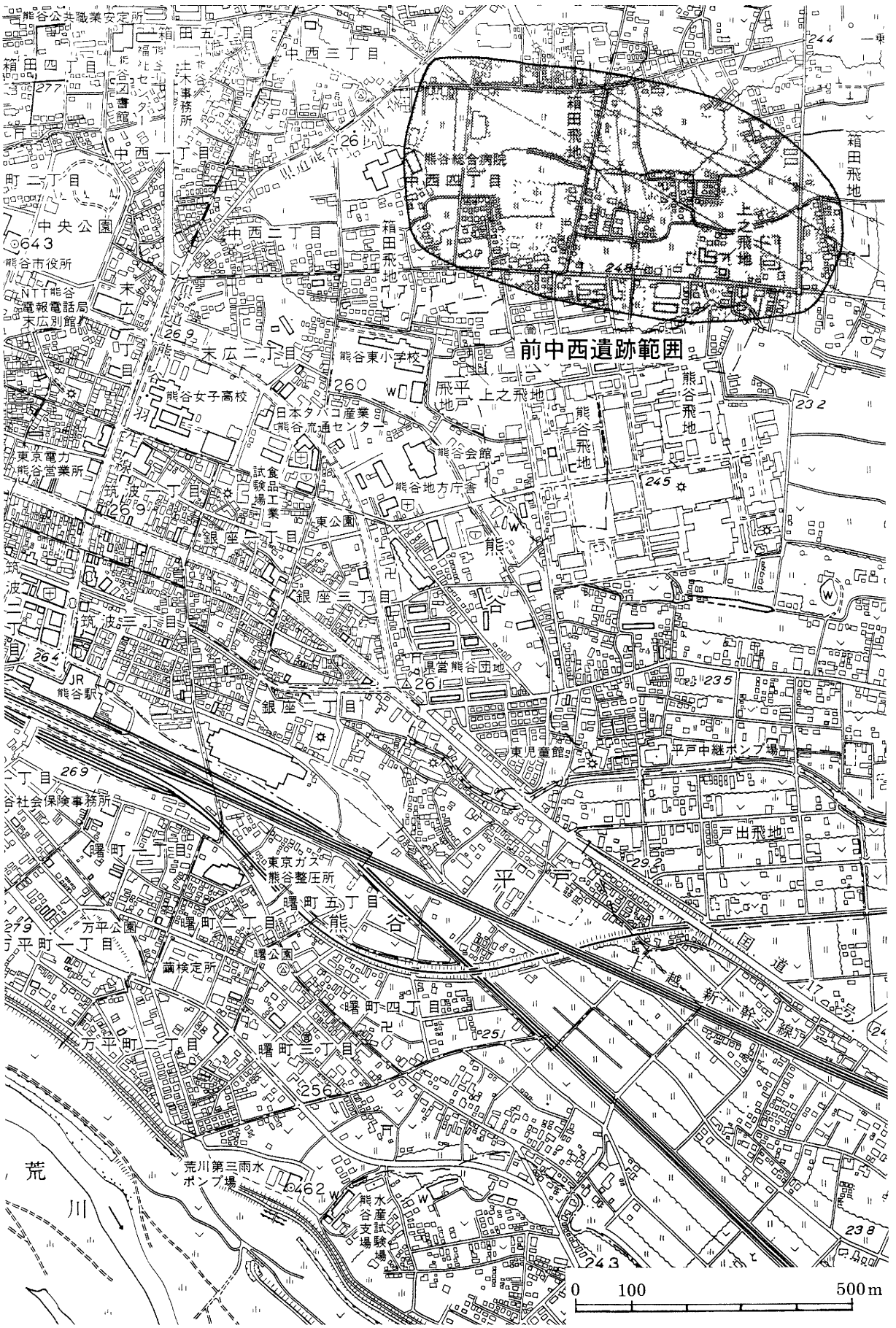
1 竪穴遺構

竪穴遺構は、総数で６基確認された。東西に長い調査区の西端と中央より東側にまとまって検出され、竪穴遺構相互や土坑と重複関係にあるものであった。第２号～第５号竪穴遺構はまとまって、第１号竪穴遺構と第６号竪穴遺構は、それぞれ単独で検出された。ただし、第１号竪穴遺構は第１号土坑と、第６号竪穴遺構は第６号土坑と、第２号～第５号竪穴遺構は相互に及び第４・５号土坑と重複関係にあった。また、第２号～第５号竪穴遺構と第６号竪穴遺構は中間に攪乱箇所を挟んでいるため不明であるが、これらは互いに重複関係にあったとも考えられる。いずれの竪穴遺構も方形ないしはそれに近い平面プランを呈していた。深さも、確認面から10cm 前後から20cm 前後の間に収まり、比較的ばらつきのないものであった。さらに時期も、出土遺物からいずれも古墳時代後期と判断でき、概ね７世紀代に収まるものである。以下各竪穴遺構ごとに詳細を記載する。

第１号竪穴遺構（第６図・第７図・第12図）

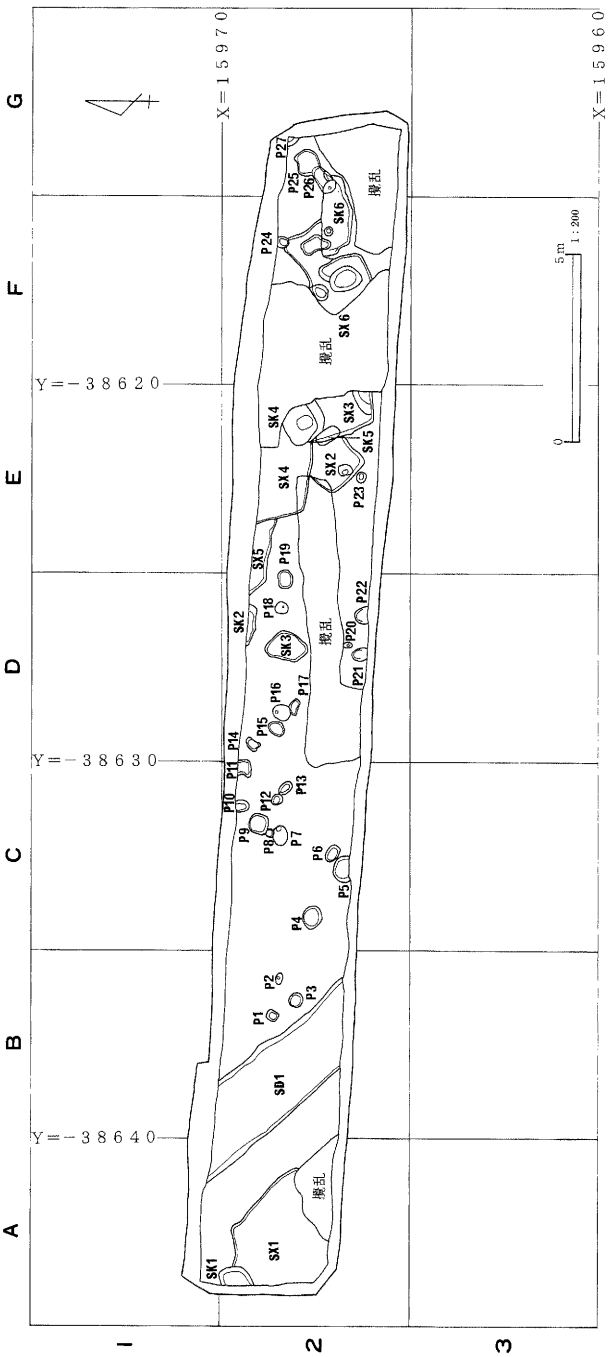
Ａ－２グリッドから検出した。遺構は第１号土坑と重複していた。ただし、断面観察上では本遺構内で第１号土坑が本遺構を壊していることから、本遺構内の土坑として捉えておきたい。

平面プランは、調査区域外にのびていることと一部攪乱を受けている関係で不明であるが、方形状を



第3図　前中西遺跡範囲図

第４図　前中西遺跡位置図



第５図　前中西遺跡全測図

呈していると推測される。規模は、検出東西長300cm、南北長250cm、深さ21cm であった。

出土遺物は、土師器甕、砥石状石製品等が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第２号竪穴遺構（第８図・第９図・第12図）

Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は第３号竪穴遺構に壊され、第５号土坑を壊している。

平面プランは長方形と推定され、規模は、長軸は他遺構との重複により不明、短軸130cm、深さ８cm であった。

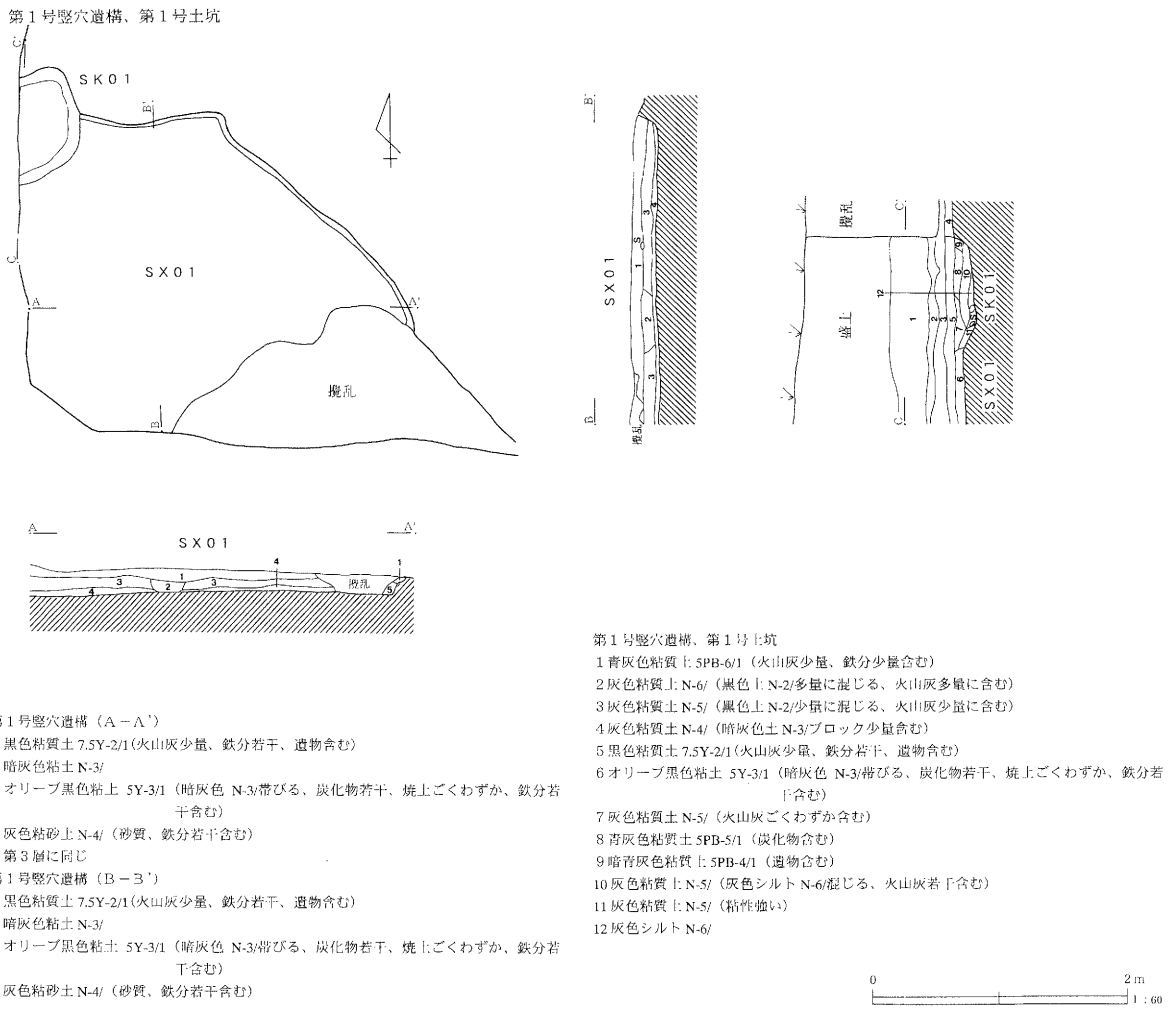
本遺構内にピットが１基存在する。また、一部攪乱により壊されている。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕、滑石製線刻紡錘車等が出土した。

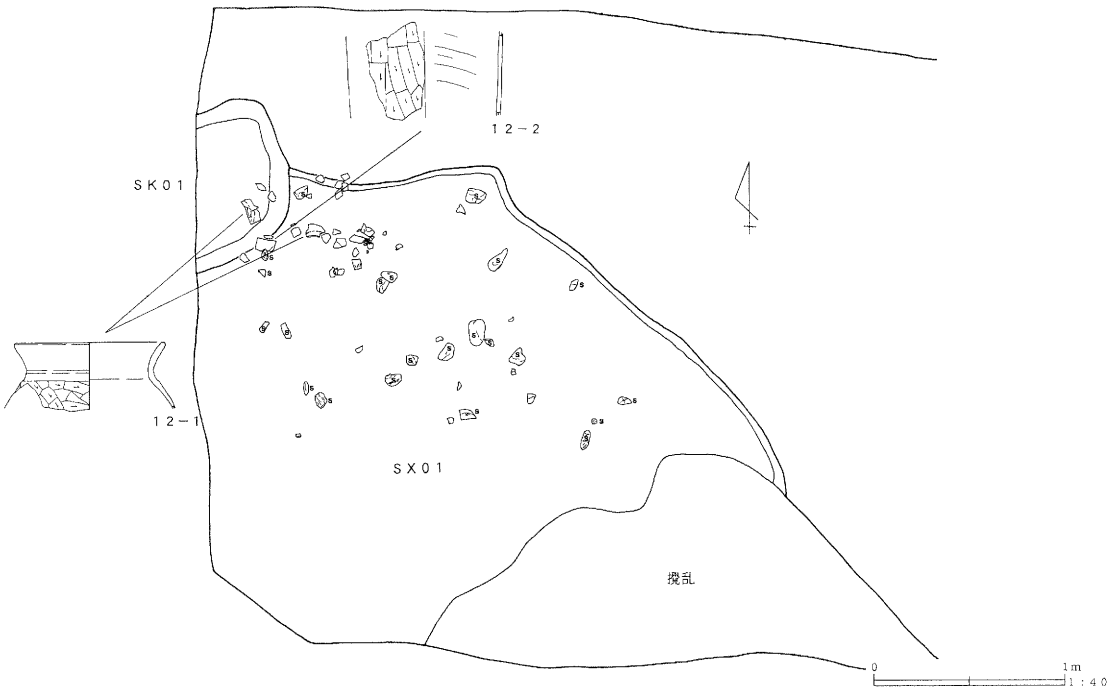
時期は、古墳時代後期と考えられる。

第３号竪穴遺構（第８図・第９図・第12図）

Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は第４号土坑に壊され、第２号竪穴遺構及び第５号土坑を壊している。



第６図　第１号竪穴遺構、第１号土坑



第７図　第１号竪穴遺構遺物分布図

平面プランは長方形と推定され、規模は、他遺構との重複及び攪乱箇所により壊されているため、長軸短軸ともに不明で、深さは16～24cmであった。

遺構の南端の一部が落ち込んでいる。

出土遺物は、土師器坏・甕等が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第４号竪穴遺構（第８図・第９図・第12図・第13図）

Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は第５号竪穴遺構及び第４号土坑を壊している。

平面プランは、調査区域外にのびることと一部攪乱を受けている関係で不明であるが、長方形と推定され、規模も、前述の理由と他遺構との重複で長軸短軸とも不明で、検出南北長138cm、深さ13～19cmであった。

出土遺物は非常に多く、土師器坏・甕・台付甕・甑、須恵器坏・転用硯等が出土した。土師器坏の中には放射状の暗文が施されているものがあった。

時期は、概ね古墳時代後期に該当するが、一部土師器台付甕は古墳時代中期の所産と考えられる。

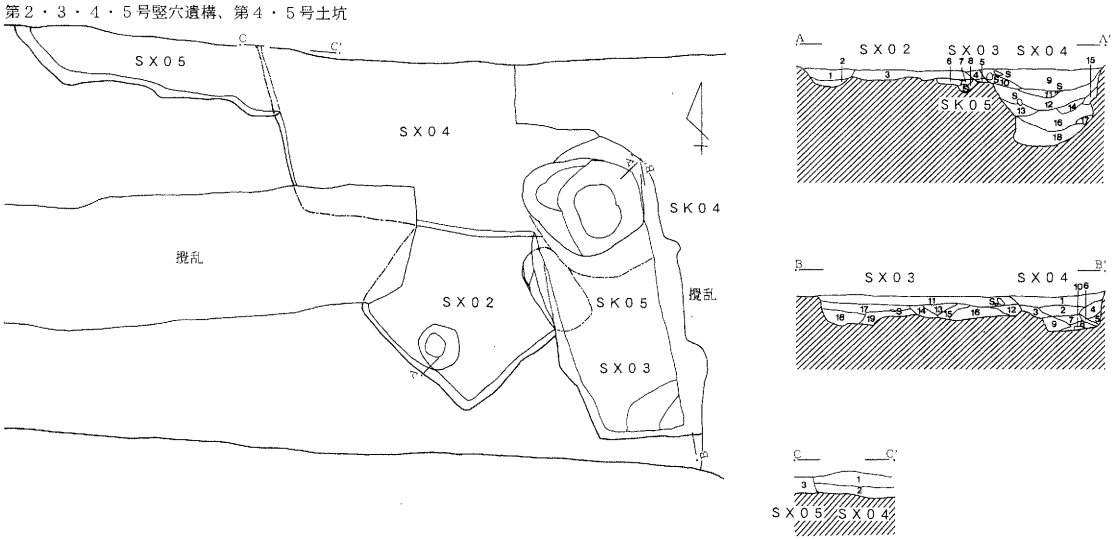
第５号竪穴遺構（第８図・第９図）

Ｄ・Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は、第４号竪穴遺構に壊されている。

平面プランは、調査区域外にのびることと他遺構と重複関係にあることから不明であるが、方形状を呈すと推定され、規模は、検出南北長53cm、深さ13cm であった。

出土遺物は、土師器高坏・甕等が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

第２・３・４・５号竪穴遺構、第４・５号土坑



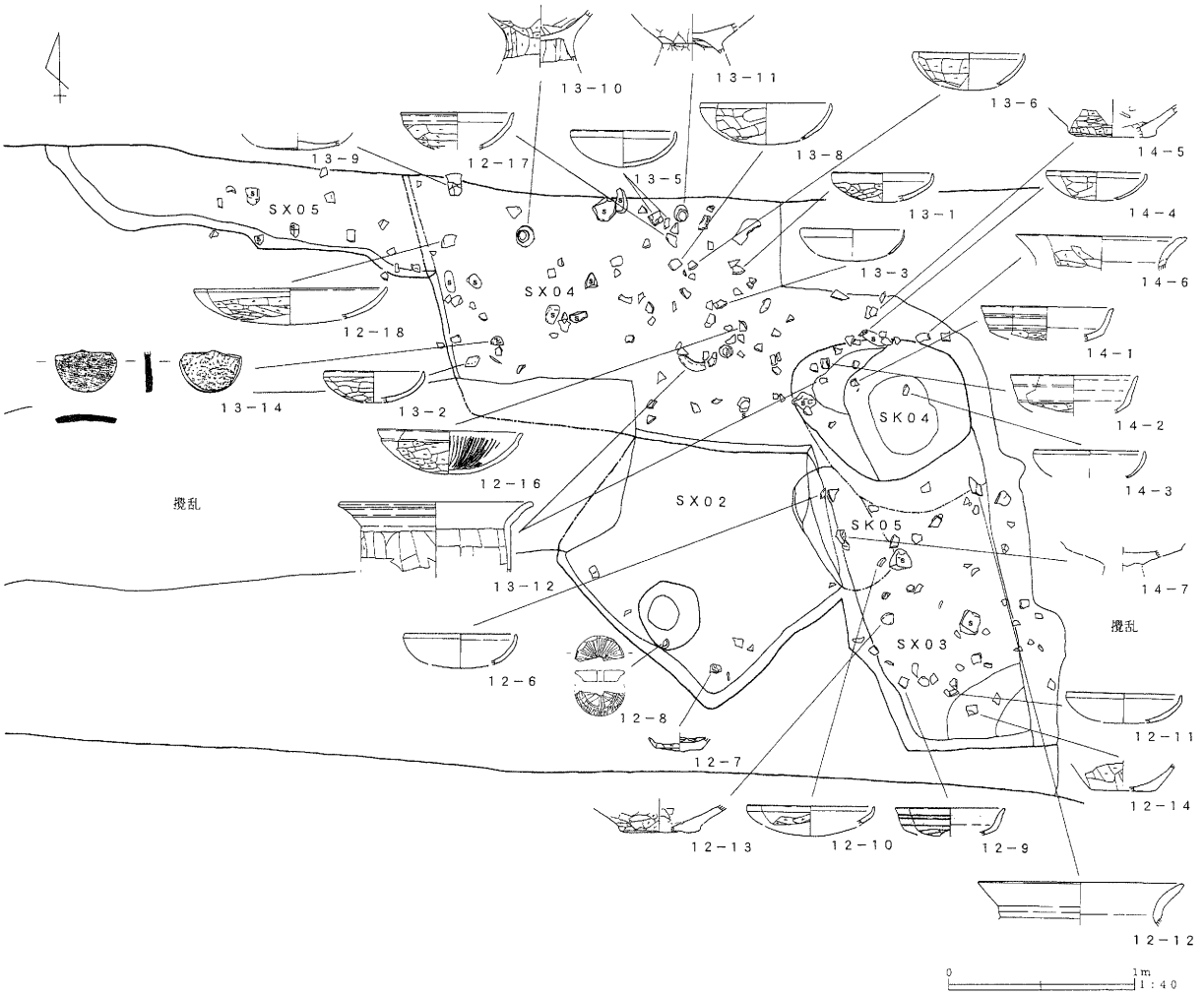
第２・３号竪穴遺構、第４・５号土坑
1 灰色土 N-4/（焼土、火山灰多量、小石少量、鉄分含む）
2 暗灰色粘質土 N-3/（若干シルト質）
3 灰色土 N-4/と N-5/の中間色（火山灰少量、小石少量、鉄分少量含む）
4 灰色土 N-4/（炭化物・焼土少量、火山灰少量、礫含む）
5 灰色土 N-4/（火山灰若干含む）
6 暗青灰色土 5PB-4/1（火山灰若干、鉄分含む）
7 灰色土 N-5/（灰白色砂質土 7.5Y-7/2 ブロック多量、炭化物、火山灰若干、鉄分少量含む）
8 灰色粘質土 N-5/（炭化物、火山灰ごくわずか、礫、鉄分ごくわずか含む）
9 黒色土 N-2/（炭化物・焼土、火山灰多量、礫、鉄分若干、遺物含む）
10 灰色土 N-4/（炭化物・焼土、火山灰若干、鉄分若干含む）
11 暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土、火山灰少量、礫含む）
12 灰色粘質土 N-4/（灰色 5Y-4/1 帯びる、炭化物・焼土、火山灰若干、礫含む）
13 暗灰色粘質土 N-3/（遺物含む）
14 暗灰色粘質土 N-3/（暗灰黄色土 2.5Y-4/2 混じる、鉄分、遺物含む）
15 オリーブ黒色粘質土 5Y-3/1（遺物含む）
16 暗灰色粘土 N-3/
17 オリーブ灰色砂 2.5GY-6/1
18 暗灰色粘土 N-3/（粘性強い、焼土若干含む）

第４・５号竪穴遺構
1 オリーブ黒色土 5Y-3/1（炭化物・焼土、火山灰少量、遺物含む）
2 オリーブ黒色土 7.5Y-3/1（炭化物・焼土、火山灰若干、小さい礫含む）
3 灰色土 10Y-4/1（火山灰少量、鉄分、遺物含む）

第３号竪穴遺構、第４号土坑
1 黒色土 N-2/（炭化物・焼土、火山灰多量、礫、鉄分若干、遺物含む）
2 暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土、火山灰少量、礫含む）
3 灰色土 N-5/（炭化物・焼土、遺物含む）
4 灰色粘質土 N-4/（灰色 5Y-4/1 帯びる、炭化物・焼土、火山灰若干、礫含む）
5 オリーブ黒色粘質土 5Y-3/1（遺物含む）
6 灰色粘質土 N-4/
7 オリーブ黒色粘質土 5Y-3/1（焼土、火山灰ごくわずか含む）
8 暗灰色粘質土 N-3/（暗灰黄色土 2.5Y-4/2 混じる、鉄分、遺物含む）
9 灰色粘質土 N-4/（炭化物・焼土、火山灰ごくわずか含む）
10 灰色粘質土 N-4/
11 灰色土 10Y-4/1（炭化物・焼土、火山灰ごくわずか、遺物多量に含む）
12 灰色土 7.5Y-4/1（炭化物・焼土、遺物含む）
13 灰色土 7.5Y-4/1（灰色土 N-4/ブロック、炭化物・焼土含む）
14 暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土、火山灰ごくわずか含む）
15 オリーブ黒色土 5Y-3/1（灰白色砂 10Y-7/2 ブロック、炭化物、鉄分含む）
16 灰色粘質土 10Y-4/1（灰白色砂質土 7.5Y-7/2 ブロック少量、鉄分少量含む）
17 灰色土 N-4/（炭化物・焼土、小さい礫、火山灰ごくわずか含む）
18 灰色土 N-5/と N-5/の中間色（灰白色砂質土 7.5Y-7/2 多量に混じる、炭化物・焼土、礫含む）
19 灰色粘質土 10Y-4/1（灰白色砂質土 7.5Y-7/2 ブロック少量、鉄分少量含む）

0　2m
1：60

第８図　第２～５号竪穴遺構、第４・５号土坑



第９図　第２～５号竪穴遺構、第４・５号土坑遺物分布図

第６号竪穴遺構（第10図・第11図・第13図）

Ｆ－２グリッドから検出した。遺構は第６号土坑に壊されている。また、第24号ピットと重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

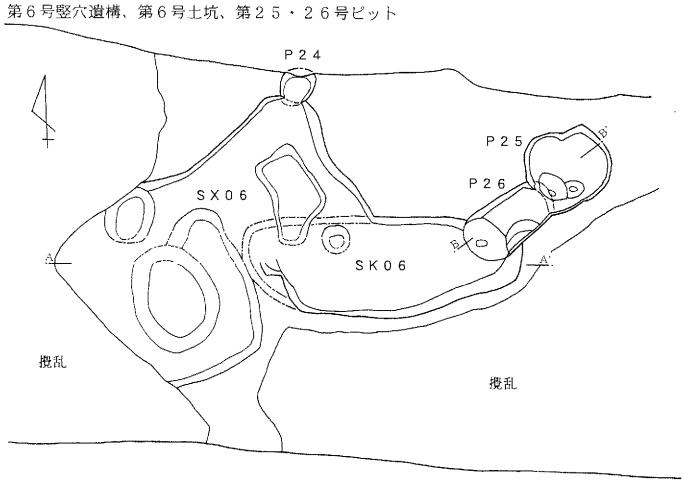
平面プランは、攪乱を受けていて不明であるが、方形状を呈すと推定され、規模は、検出長軸220cm、短軸は不明、深さ16cm であった。

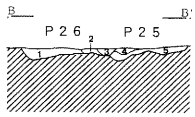
遺構内に、浅い土坑状の落ち込みが４ヶ所確認された。

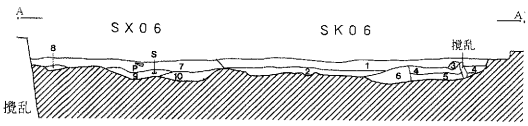
出土遺物は、土師器坏・甕等が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第６号竪穴遺構、第６号土坑、第２５・２６号ピット





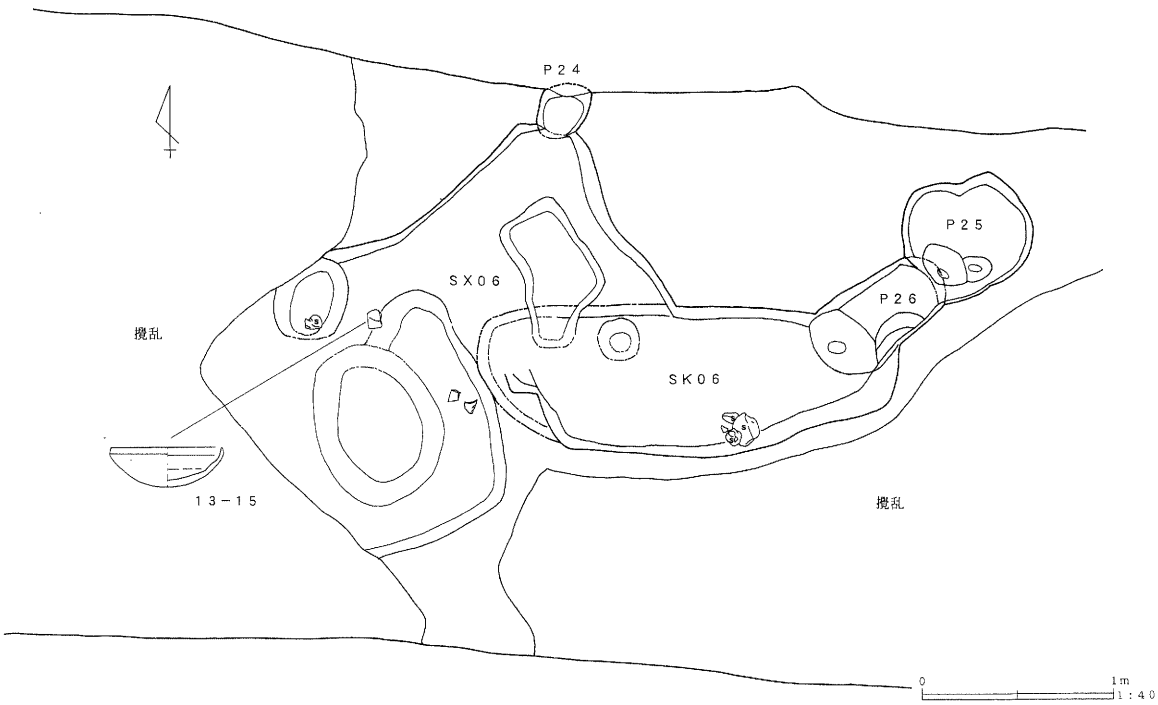


第６号竪穴遺構、第６号土坑
1 黄灰色土 2.5Y-4/1（灰色土 N-4/ブロック多量、灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック少量、火山灰少量、鉄分多量、遺物含む）
2 灰色粘質土 N-5/（若干シルト質、灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック少量含む）
3 灰色粘質土 N-5/
4 灰色粘質土 N-5/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック若干含む）
5 灰色粘質土 N-4/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック多量、炭化物含む）
6 灰色粘質土 N-4/
7 暗青灰色土 5PB-4/1（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック若干、炭化物・焼土、火山灰若干、遺物含む）
8 灰色粘質土 N-5/
9 灰色粘質土 N-4/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック、炭化物含む）
10 灰色粘質土 N-5/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 ブロック、炭化物・焼土含む）

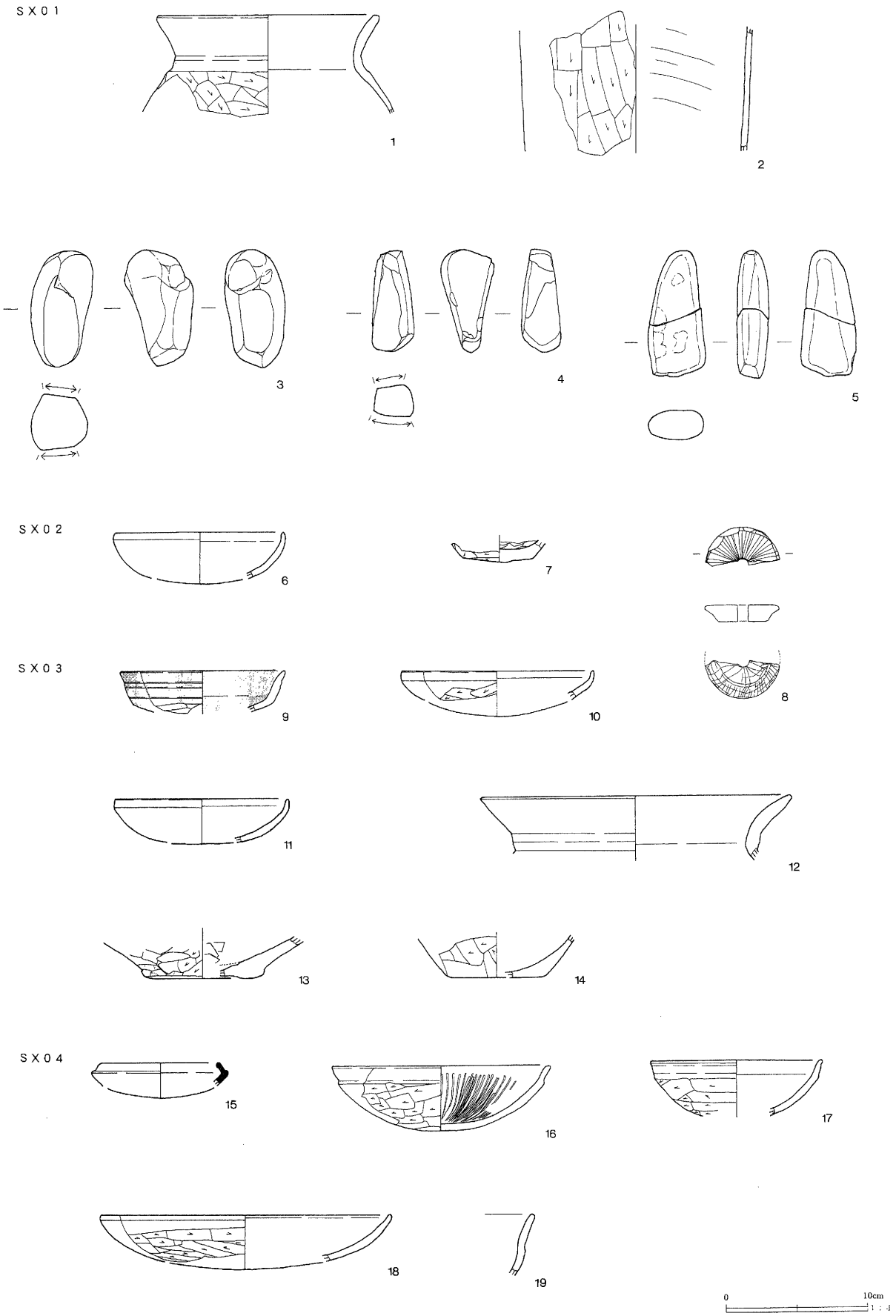
第２５・２６号ピット
1 灰色粘質土 N-4/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 小ブロック、炭化物・焼土、遺物含む）
2 灰色粘質土 N-5/
3 灰色粘質土 N-4/
4 灰色粘砂土 7.5Y-6/1
5 灰色粘質土 N-5/（灰色粘砂土 7.5Y-6/1 若干、炭化物・焼土、遺物含む）

0　2m
1：60

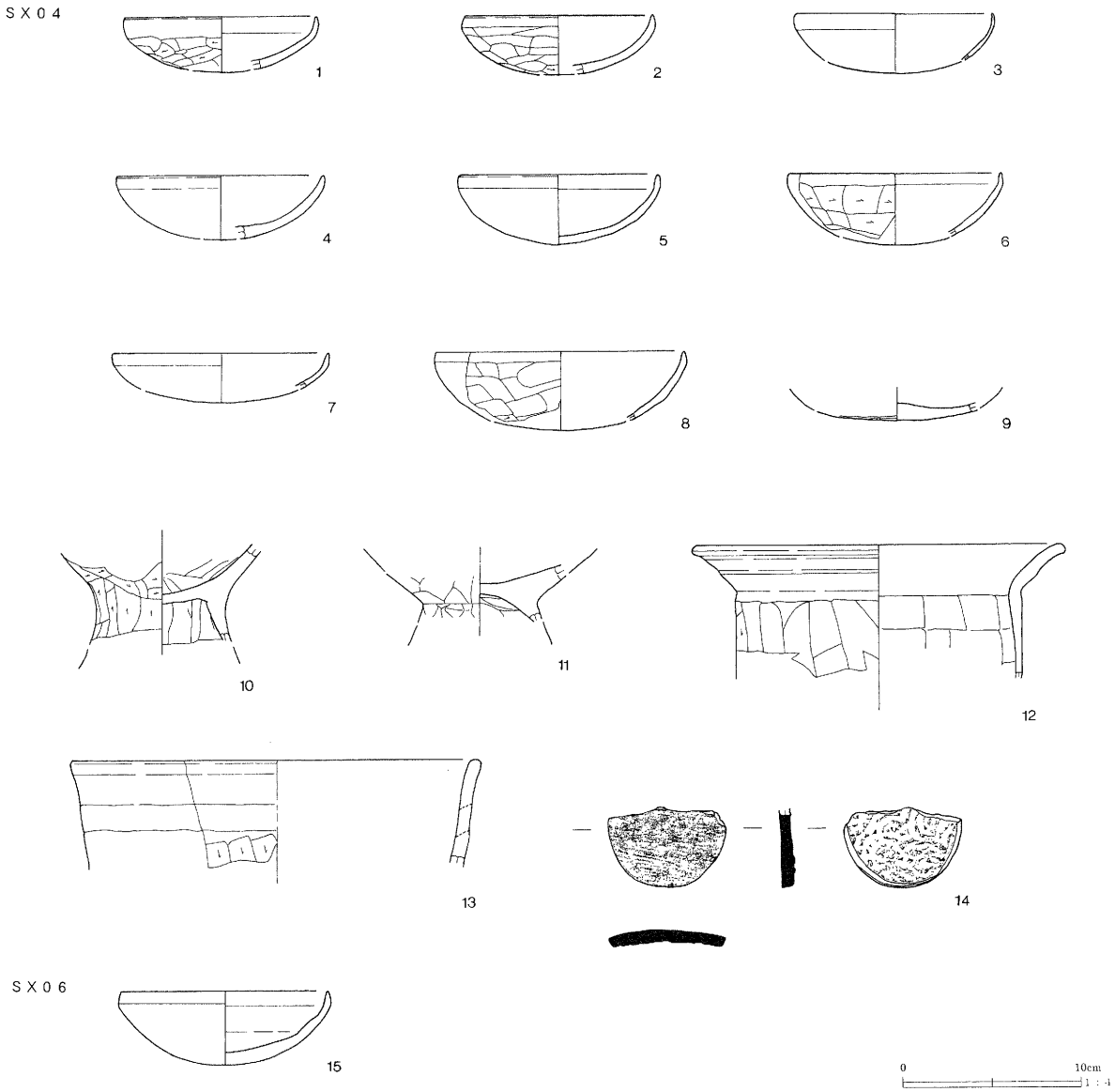
第10図　第６号竪穴遺構、第６号土坑、第24～26号ピット



第11図　第６号竪穴遺構、第６号土坑遺物分布図



第12図　第１～４号竪穴遺構出土遺物



第13図　第４・６号竪穴遺構出土遺物

第２表　第１～４号竪穴遺構出土遺物観察表（第12図）

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SX01	甕	口径 15.9 頸部径 13.3 残存高 7.0	口縁部内外面はヨコナデ。口唇部は平坦である。胴部外面はナナメ方向のヘラケズリ。胴部内面はヨコナデ。口縁部はくの字に外反して立ち上がる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、黒色粒子、白色粒子、褐色粒子含む	外面:にぶい橙色 5YR-6/3、褐灰色 5YR-4/1 褐灰色 10YR-4/1 内面:灰黄褐色 10YR-6/2	良好	口縁部の70%	外面に黒斑あり。
2	SX01	甕	胴部径(16.2)	胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。 胴部内面はヨコナナメ方向のヘラナデ。 胴部はほぼ垂直におりる。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 2.5YR-6/4、にぶい黄橙色 10YR-6/3 内面:灰黄褐色 10YR-6/2	良好	胴部破片	
3	SX01	砥石	長さ 8.3 幅 4.3 厚さ 4.9 重さ 200g	平面は長楕円形で、対面する２面が平滑になっており砥ぎ面として使用されたと思われる。 石質は砂岩。					

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
4	SX01	砥石	長さ 7.3 幅 3.0 厚さ 2.3 重さ 97g	逆三角形の石の相対する二面に砥ぎ面に使用されたと思われる平滑面がある。 石質は砂岩系。					
5	SX01	石製品	長さ 9.0 幅 4.0 厚さ 2.2 重さ 115g	平面形が二等辺三角形の弾丸状の石製品。表面は比較的平滑である。 石質は砂岩。					
6	SX02	坏	口径(12.0) 残存高 3.3	口縁部内外面はヨコナデ？体部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ。 口縁部はやや内湾ぎみに立つ。体部はやや平底ぎみの丸底。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-6/4 内面:橙色5YR-6/6	不良	10%以下	器面粗い。
7	SX02	甕	底部 5.0 残存高 1.5	胴部・底部とも外面はヘラケズリ。 内面には指頭圧痕あり。ヘラケズリのためやや円錐形（中心のとがった)の底部である。	細粒砂、中粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子含む	外面:明赤褐色 2.5YR-5/6 内面:にぶい橙色 7.5YR-6/4	良好	底部のみ	
8	SX02	紡錘車	狭面径 3.6 広面径 5.3 厚さ 1.2 (中央最大) 孔径 0.75 重さ 20g	狭面及び広面に軸孔から放射状の線刻が施されている。さらにふちにそって円を描く線刻が施されている。 断面はややくびれた台形を呈す。 石質は滑石。		明緑灰色 7.5GY-8/1を呈すが全体が酸化し、にぶい黄褐色 10YR-5/3を呈す		50%	
9	SX03	坏	口径(11.8) 残存高 2.9	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部は２つの段をもち、外反して直立する。口縁部と底部との境にわずかな稜がある。底部は丸底ぎみ。	細粒砂、粗粒砂、白色粒子、雲母含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-5/4 内面:橙色 5YR-6/6	普通	口縁部の10%	外面に黒斑あり。内外面とも赤彩あり。
10	SX03	坏	口径(13.8) 残存高 2.1	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ。 口縁部は直立する。底部は丸底と思われる。	細粒砂、中粒砂、石英、雲母含む	橙色 7.5YR-6/6	普通	口縁部の10%	
11	SX03	坏	口径(12.4) 器高 3.1	器面が脆弱で摩滅しているため調整は不明。 口縁部は直立する。底部は丸底。	細粒砂含む	にぶい黄橙色 10YR-7/2	不良	15%	
12	SX03	甕	口径(22.2) 頸部径 17.2 残存高 4.7	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁部はくの字に外反する。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、長石、雲母含む	外面:灰黄褐色 10YR-5/2 内面: 灰黄褐色 10YR-6/2、にぶい黄橙色 10YR-7/3	良好	口縁部破片	
13	SX03	甕	底径(8.5) 残存高 2.9	底部外面はヘラケズリ。胴部内面は木口状工具のナデ。底部は未調整。 底部はあげ底で周縁がドーナツ状である。内面は剥離している。	細粒砂、中粒砂、細礫、石英、雲母含む	体部外面:黒褐色 2.5Y-3/1 底部外面:橙色 2.5YR-6/6 底部内面:灰黄褐色10YR-6/2	普通	底部破片	
14	SX03	甕	底径(6.9) 残存高 3.0	胴部外面及び底部外面はヘラケズリ。 胴部内面はナデ。 底部は平底。底部から大きく開いて立ち上がる。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-6/4 内面:褐灰色 10YR-4/1	普通	底部の20%	外面にスス付着。
15	SX04	坏身	口径(8.4) 残存高 1.7	ロクロ成形。 口縁部は内傾して直立し、体部にかけて鋭角なくの字に屈曲する。	細粒砂主体、中粒砂、白色粒子、黒色粒子含む	灰白色 5Y-7/1	良好	口縁部の15%	
16	SX04	坏	口径(15.4) 器高 4.6	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。 口縁部は外方へ開く。口縁部と体部との境に稜がある。底部は丸底。内面は放射状暗文あり。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:橙色5YR-6/6、一部にぶい黄橙色10YR-7/2 内面:橙色5YR-6/8	良好	15%	

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
17	SX04	坏	口径(12.2) 残存高 3.9	口縁部外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。内面はミガキが施されている。 口縁部は外反して立ち上がる。内面に放射状暗文があるように見えるが不明瞭。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、雲母含む	明赤褐色 2.5YR-5/6	良好	20%	
18	SX04	坏	口径(20.6) 残存高 3.3	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。内面にミガキが施されている。 口縁部は短く直立する。内面に放射状暗文があるように見えるが不明瞭。器高浅く底部は丸底である。	中粒砂、粗粒砂、細礫(¢3mm)、白色粒子、赤褐色粒子、石英、雲母含む	外面:明赤褐色 2.5YR-5/8 内面:橙色2.5YR-6/6	良好	口縁部の20%	
19	SX04	坏	—	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。 口縁部はゆるやかに外反して開く。	中粒砂、粗粒砂、細礫、黒色粒子赤褐色粒子含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-6/3 内面:にぶい橙色 7.5YR-7/3	普通	口縁部破片	

第3表　第4・6号竪穴遺構出土遺物観察表（第13図）

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SX04	坏	口径(11.0) 器高(3.1)	口縁部内外面はヨコナデ？体部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ？ 口縁部は直立する。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、赤褐色粒子含む	外面:橙色 5YR-6/6 内面:橙色 5YR-6/8	不良	20%	
2	SX04	坏	口径 10.6 器高 3.4	口縁部内外面はヨコナデ？体部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ。 口縁部は直立する。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:にぶい黄橙色 10YR-7/3 内面:橙色 7.5YR-7/6	不良	40%	器面粗い。
3	SX04	坏	口径(7.0) 器高 2.7	器面が脆弱で摩滅が激しく調整は不明。 口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。底部は丸底。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:暗灰黄色 2.5YR-4/2 内面:にぶい黄橙色 10YR-7/2	不良	口縁部の15%	器面脆弱。
4	SX04	坏	口径(11.8) 残存高 3.5	口縁部内外面はヨコナデ？体部外面はヘラケズリ？ 口縁部はやや外反ぎみに直立する。 体部・底部は丸底。	細粒砂、中粒砂含む	橙色 7.5YR-7/6	不良	10%	
5	SX04	坏	口径(11.1) 器高 3.9	口縁部外面はヨコナデ。他は器面が脆弱で摩滅していて調整は不明。 口縁部は直立する。底部は丸底。	細粒砂、粗粒砂、赤褐色粒子、長石含む	外面:灰白色 10YR-7/1 内面:にぶい黄橙色 10YR-7/2	不良	25～30%	
6	SX04	坏	口径(12.0) 残存高 3.5	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ。 口縁部はやや内湾ぎみに立つ。底部は丸底。	中粒砂、粗粒砂、白色粒子、石英含む	にぶい橙色 7.5YR-6/4	不良	15%	器面脆弱。
7	SX04	坏	口径(12.2) 残存高 2.0	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリだが摩滅していて不明。 口縁部は直立ぎみに立つ。底部は丸底と思われる。	細粒砂、粗粒砂含む	にぶい橙色 7.5YR-6/4	普通	口縁部の10%	
8	SX04	坏	口径(13.9) 残存高 3.9	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。 口縁部は直立する。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、白色粒子含む	外面:橙色 2.5YR-6/8、にぶい褐色7.5YR-5/4 内面:橙色 5YR-6/8	不良	10%	器面摩滅。
9	SX04	坏	残存高 0.9	底部外面はヘラケズリ。底部内面はナデ。 底部は丸底である。	細粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子含む	外面:黒色 5Y-2/1 内面:灰黄褐色 10YR-5/2	良好	底部のみ	

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
10	SX04	台付甕	－	胴部・脚部外面はヘラケズリ。内面は指ナデ痕残る。 脚部はやや外反して直線的におりるようである。	中粒砂、粗粒砂、白色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:橙色 2.5YR-6/6 体部外面:灰褐色 5YR-4/2 脚部内面:灰褐色 7.5YR-5/2	良好	脚部付近破片	器面若干粗い。
11	SX04	台付甕	－	外面はヘラケズリ？内面はナデ。脚部内面はヘラ状工具によるナデ。 脚部はやや外方へ開くようである。	中粒砂、粗粒砂、細礫(¢3～4mm)、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:橙色 5YR-7/8、褐灰色 5YR-4/1 内面:暗灰色N-3/	普通	脚部付近破片	
12	SX04	甕	口径(21.0) 残存高 7.5	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。胴部内面は木口状工具によるナデ。 口縁部は大きく外反し、中間と肩部に段を持つ。胴部は直立する。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、長石含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-6/4 内面:橙色 7.5YR-7/6、にぶい黄橙色 10YR-7/3	良好	口縁部の30%	内面に黒斑あり。
13	SX04	甑	口径(23.0) 残存高 6.1	口縁部内外面はヨコナデ。胴部はタテ方向の粗いヘラケズリ。内面はナデ。 口縁部は若干外反する程度でほぼ直立する。外面に粘土紐継ぎ目痕あり。	細粒砂、中粒砂、細礫、長石、雲母含む	にぶい黄橙色 10YR-7/3	良好	口縁部の一部	
14	SX04	転用硯	長さ 4.5 幅 6.1 厚さ0.5～0.7	外面は平行タタキ目痕。内面は同心円あて具痕。端部は面取りのヘラケズリが施されている。上端は欠損している。外面に墨が付着する。	細粒砂多量、中粒砂、白色粒子、多量含む	青灰色5B-6/1	良好		
15	SX06	坏	口径(11.7) 器高 4.2	口縁部内外面はヨコナデ。他は摩滅激しく調整は不明。 口縁部はやや内湾ぎみに立つ。底部は丸底。	細粒砂含む	外面:橙色 5YR-6/8、にぶい黄橙色 10YR-6 内面:橙色 5YR-6/8	不良	30～40%	器面摩滅。

2　土坑

土坑は、総数で6基確認された。調査区の西端・中央部・東部で各々検出され、第2号土坑・第3号土坑は単独で、第1号土坑・第4号土坑・第5号土坑・第6号土坑はそれぞれ他遺構と重複して検出された。平面プランは、方形ないしは楕円形を呈している。遺構の深さは、第4号土坑の60cmを除いて、遺構確認面から10～20cmに収まる。出土遺物量は、第4号土坑が圧倒的に多く、他の土坑は少ない。時期は、すべて古墳時代後期に該当する。以下各土坑ごとに詳細を記載する。

第1号土坑（第6図）

A－2グリッドから検出した。第1号竪穴遺構内の土坑である。

平面プランは、一方が調査区域外にのびているため不明であるが、隅丸方形状を呈すと推定され、規模は、一方軸77cm、深さ15cmであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第2号土坑（第14図）

D－2グリッドから検出した。

平面プランは、調査区域外にのびているため不明であるが、長方形を呈すと推測され、規模は、一方軸105cm、深さ20cmであった。

出土遺物は、土師器破片が少量出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第３号土坑（第14図）

Ｄ－２グリッドから検出した。

平面プランは不整形な楕円形で、規模は、長軸112cm、短軸73cm、深さ10cmであった。

出土遺物は、土師器破片が若干出土したが、図示可能な遺物ではなかった。また、時期を特定するに足る資料ではなかった。

第４号土坑（第８図・第９図・第15図）

Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は、第４号竪穴遺構に壊され、第３号竪穴遺構を壊している。

平面プランは、一部攪乱を受けているため不明であるが、隅丸方形状を呈すと推測され、規模は、一方軸83cm（復元推定107cm）、深さ60cmであった。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕、須恵器甕等が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第５号土坑（第８図・第９図・第15図）

Ｅ－２グリッドから検出した。遺構は、第２号・第３号竪穴遺構に壊されている。

平面プランは、他遺構との重複関係により不明であり、規模も深さ10cm以外不明であった。ただし、図中では隅丸方形で、長軸70cm、短軸35cmと復元してある。

出土遺物は、土師器高坏・甕等が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

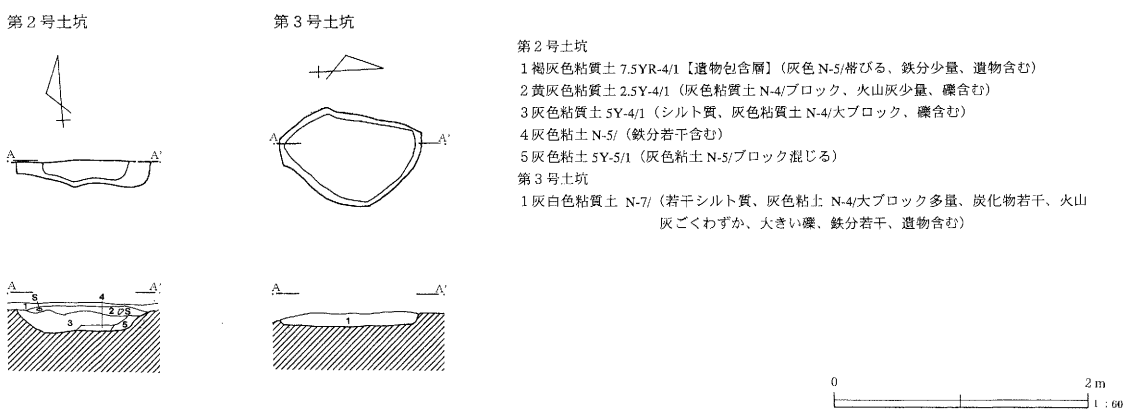
第６号土坑（第10図・第11図・第15図）

Ｆ・Ｇ－２グリッドから検出した。遺構は、第６号竪穴遺構を壊し、第26号ピットに壊されている。

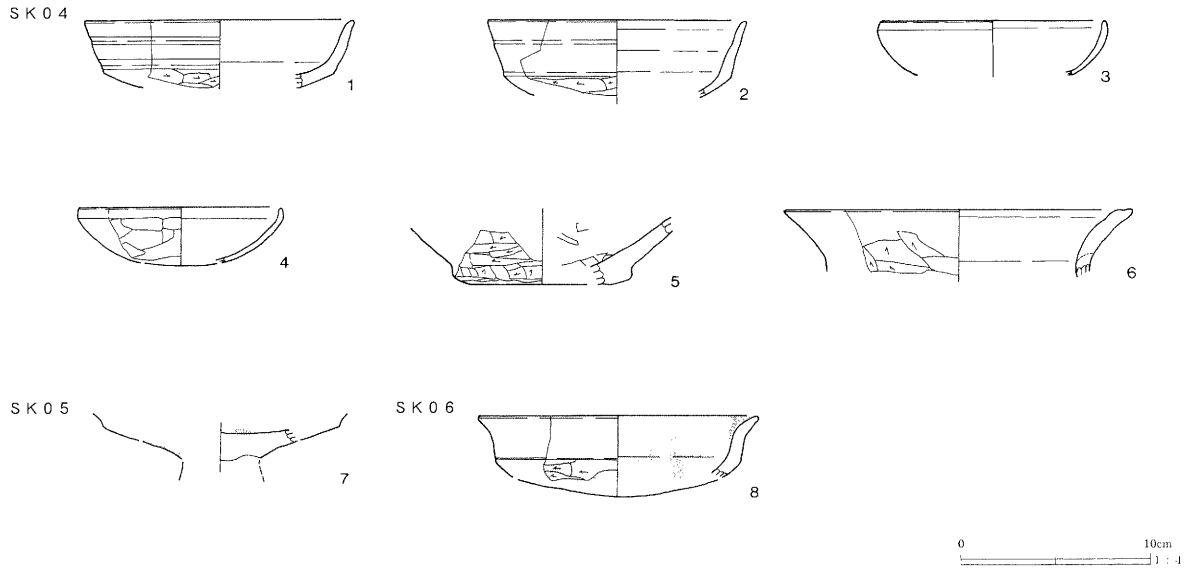
平面プランは長楕円形で、規模は、推定長軸221cm、短軸80cm、深さ18cmであった。

出土遺物は、土師器坏・高坏等が出土した。土師器坏は赤彩が施されていた。

時期は、古墳時代後期と考えられるが、第６号竪穴遺構出土遺物の時期と土層観察上の新旧関係とに食い違いがみられる。



第14図　第２・３号土坑



第15図　第４～６号土坑出土遺物

第４表　土坑出土遺物観察表（第15図）

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	SK04	坏	口径(14.2) 残存高 3.6	口縁部内外面はヨコナデ。底部はヘラケズリ。 口縁部はゆるい段をもって、やや内湾ぎみに開いて立つ。底部は丸底と思われる。	中粒砂、粗粒砂、白色粒子、雲母含む	にぶい橙色 7.5YR-7/4、一部褐灰色 7.5YR-6/1	良好	口縁部の10%	
2	SK04	坏	口径(13.6) 残存高 4.0	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部は直立して開く。底部は丸底と思われる。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子、石英、雲母含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-6/3 内面:にぶい橙色 7.5YR-6/1	普通	口縁部の10%	
3	SK04	坏	口径(12.2) 残存高 2.9	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ。 口縁部は内湾ぎみに立つ。底部は平底ぎみか？	細粒砂、中粒砂、細礫、雲母含む	橙色 5YR-6/6	普通	口縁部の15%	
4	SK04	坏	口径(10.7) 残存 高3.0	口縁部内外面はヨコナデ。体部はヘラケズリ。 口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。底部は丸底である。	中粒砂、粗粒砂、細礫、雲母含む	橙色 5YR-6/6	普通	10%	
5	SK04	甕	底径(9.4) 残存高 3.5	胴部外面はヘラナデ。底部付近はヘラケズリ。底部外面は未調整。内面はヘラまたは木口状工具によるナデ。底部は平底である。胴部は大きく開いて立ち上がる。	中粒砂、粗粒砂、細礫(φ5mm大)、白色粒子、雲母含む	にぶい黄橙色 10YR-7/3	良好	底部の20%	
6	SK04	甕	口径(18.5) 残存高 3.6	口縁部内外面はヨコナデ。口縁部下半はヘラケズリ。 口縁部は外反して開く。口唇部に若干の凹みがある。	細粒砂、中粒砂、雲母含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-6/4、黒色 10YR-2/1 内面:褐灰色10YR-2/1、黒色2.5YR-2/1	良好	口縁部の10%	
7	SK05	高坏	－	内外面ともナデ？ 内外面赤彩。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、雲母含む	にぶい橙色 7.5YR-7/4	普通	坏部破片	
8	SK06	坏	口径(14.9) 残存高 3.3	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。内外面赤彩。 口縁部は外反する。口縁部と体部との境に若干の稜をもつ。	粗粒砂、細礫、白色粒子、長石含む	明赤褐色 2.5YR-5/6	良好	口縁部の一部	

3 ピット

ピットは、総数にして27基検出した。ピットは調査区の中央部を中心に不規則な位置で検出された。比較的まとまって検出したピットも見られるが、全体的に散漫な感じで、規模も大小様々であった。出土遺物は、全体の約75％のピットで検出され、特に第11号ピット及び第16号ピットで多く出土した。土師器坏・高坏・鉢・甕・壺等が見られ、概ね古墳時代後期の所産と考えられる遺物であったが、若干古墳時代中期のものも見られた。

以下ピットについては、事実記載が必要と考えられるもののみを記載した。事実記載のないピットについては、一覧表を参照されたい（第10図・第16図・第17図・第18図）。

第２号ピット（第16図）

Ｂ－２グリッドから検出した。

平面プランは楕円形で、規模は、長軸30cm、短軸18cm、深さ22cm であった。断面形は、二段階の掘り込みであった。

出土遺物は、土師器甕等の破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第３号ピット（第16図）

Ｂ－２グリッドから検出した。

平面プランはほぼ円形で、規模は、長軸37cm、短軸34cm、深さ22cm であった。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕等の破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期が主体と考えられるが、中期の遺物も含まれていた。

第４号ピット（第16図）

Ｃ－２グリッドから検出した。

平面プランはほぼ円形で、規模は、長軸57cm、短軸54cm、深さ29cm であった。

覆土は、土層断面観察上では中央に柱痕らしき形跡が見られるものであった。

出土遺物は、土師器甕等の破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

第５号ピット（第16図）

Ｃ－２グリッドから検出した。

平面プランは楕円形で、規模は、長軸65cm、短軸推定50cm、深さ24cm であった。

覆土は、土層観察上ではやや不明瞭であったが、柱痕のように見える形跡があった。

出土遺物は、土師器坏・甕等の破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

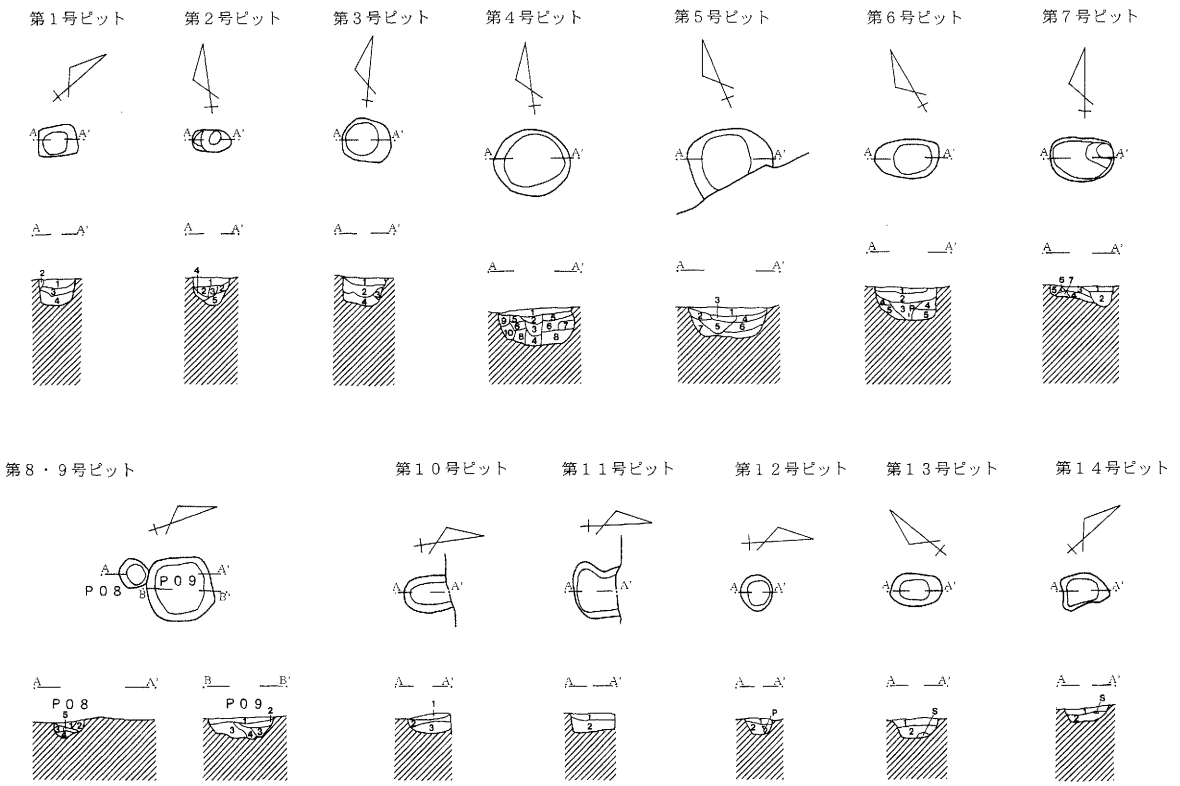
第６号ピット（第16図）

Ｃ－２グリッドから検出した。

平面プランは楕円形で、規模は、長軸51cm、短軸31cm、深さ26cm であった。

覆土は、土層観察上ではやや不明瞭であったが、柱痕らしき形跡の見られるものであった。

出土遺物は、土師器破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。



第１号ピット
１灰色粘質土 N-4/（鉄分若干含む）
２灰色粘質土 N-5/
３暗灰色粘質土 N-3/
４暗灰色粘土 N-3/（粘性強い、小さい礫含む）
第２号ピット
１灰色粘質土 N-4/（火山灰若干、鉄分少量含む）
２灰色粘質土 N-4/（シルト質、鉄分若干含む）
３暗灰色粘質土 N-3/
４灰色粘土 N-5/
５灰色粘土 N-4/
第３号ピット
１灰色粘質土 N-4/（鉄分少量、遺物含む）
２灰色粘土 7.5Y-6/1（灰色粘質土 N-4/大ブロック多量に含む）
３青灰色粘土 5PB-6/1
４灰色粘土 N-5/（若干シルト質）
第４号ピット
１暗灰色粘質土 N-3/（火山灰ごくわずか、鉄分少量含む）
２灰色粘質土 7.5Y-4/1（炭化物・焼土、火山灰ごくわずか含む）
３灰色粘質土 7.5Y-5/1（第２層土ブロック含む）
４灰色粘土 N-6/
５灰色粘質土 7.5Y-5/1（シルト感強い）
６灰色粘質土 5Y-4/1（粘性強い）
７黒色粘質土 7.5Y-2/1（火山灰ごくわずか）
８灰色粘土 5Y-4/1
９オリーブ黒色粘質土 5Y-3/1
10 灰色粘質土 N-4/（鉄分少量含む）
第５号ピット
１灰色粘質土 N-5/（シルト質、炭化物・焼土、遺物含む）
２灰色粘質土 N-5/（シルト感強い
３灰色粘質土 N-4/（炭化物・焼土、火山灰若干含む）
４第２層にほぼ同じ
５灰色粘質土 N-6/（灰色粘質土 N-4/小ブロック若干含む）
６灰色粘土 N-5/（鉄分少量含む）
７灰色粘土 N-4/（火山灰若干含む）
第６号ピット
１暗灰色粘質土 N-3/（火山灰ごくわずか、鉄分少量含む）
２灰色粘質土 N-5/（火山灰若干、鉄分多量に含む）
３灰色粘質土 N-6/（鉄分少量、遺物含む）
４青灰色粘質土 5PB-5/1（鉄分少量含む）
５青灰色粘砂土 5PB-5/1（シルト感強い、炭化物含む）

第７号ピット
１暗灰色土 N-3/（火山灰若干含む）
２灰色粘質土 N-5/（暗灰色土 N-3/ブロック多量に含む）
３灰色粘質土 N-4/（火山灰若干含む）
４灰色粘質土 7.5Y-5/1（シルト質）
５灰色粘質土 N-4/（火山灰若干、鉄分若干含む）
６灰色粘質土 N-6/
７灰色粘質土 N-5/（シルト質）
第８号ピット
１暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土若干、火山灰少量含む）
２灰色粘質土 N-4/（火山灰ごくわずか含む）
３灰色粘質土 N-6/（鉄分少量含む）
４灰色粘質土 N-5/（シルト質、鉄分少量含む）
第９号ピット
１暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土、火山灰多量含む）
２灰色粘質土 N-4/（火山灰若干含む）
３灰色粘質土 N-6/（火山灰ごくわずか含む）
４灰色粘質土 N-5/（灰色粘質土 N-4/ブロック含む）
第１０号ピット
１暗灰色土 N-3/（鉄分若干含む）
２灰色土 N-4/（焼土・火山灰含む）
３灰色土 N-5/（灰色土 N-4/少量混じる）
第１１号ピット
１暗灰色土 N-3/（火山灰少量、鉄分若干含む）
２灰色土 N-5/（若干シルト質、暗灰色土 N-3/ブロック混じる、鉄分少量含む）
第１２号ピット
１暗灰色土 N-3/（火山灰多量に含む）
２灰色土 N-4/（シルト質、鉄分若干、遺物含む）
第１３号ピット
１暗灰色土 N-3/（炭化物・焼土、火山灰多量、遺物含む）
２灰色土 N-4/（シルト質、鉄分少量含む）
第１４号ピット
１灰色粘質土 N-4/（火山灰若干、鉄分少量含む）
２灰色粘質土 5Y-5/1（鉄分少量含む）

0　2 m
1 : 60

第16図　第１～14号ピット

第７号ピット（第16図）

Ｃ－２グリッドから検出した。

平面プランは楕円形で、長軸50cm、短軸35cm、深さは16cm であった。断面形は、二段階の掘り込みであった。

出土遺物は、土師器の破片が出土したが図示可能な遺物ではなかった。

第９号ピット（第16図）

Ｃ－２グリッドから検出した。遺構は第８号ピットに壊されている。

平面プランは隅丸方形状の円形で、規模は、長軸50cm、短軸50cm、深さ16cm であった。

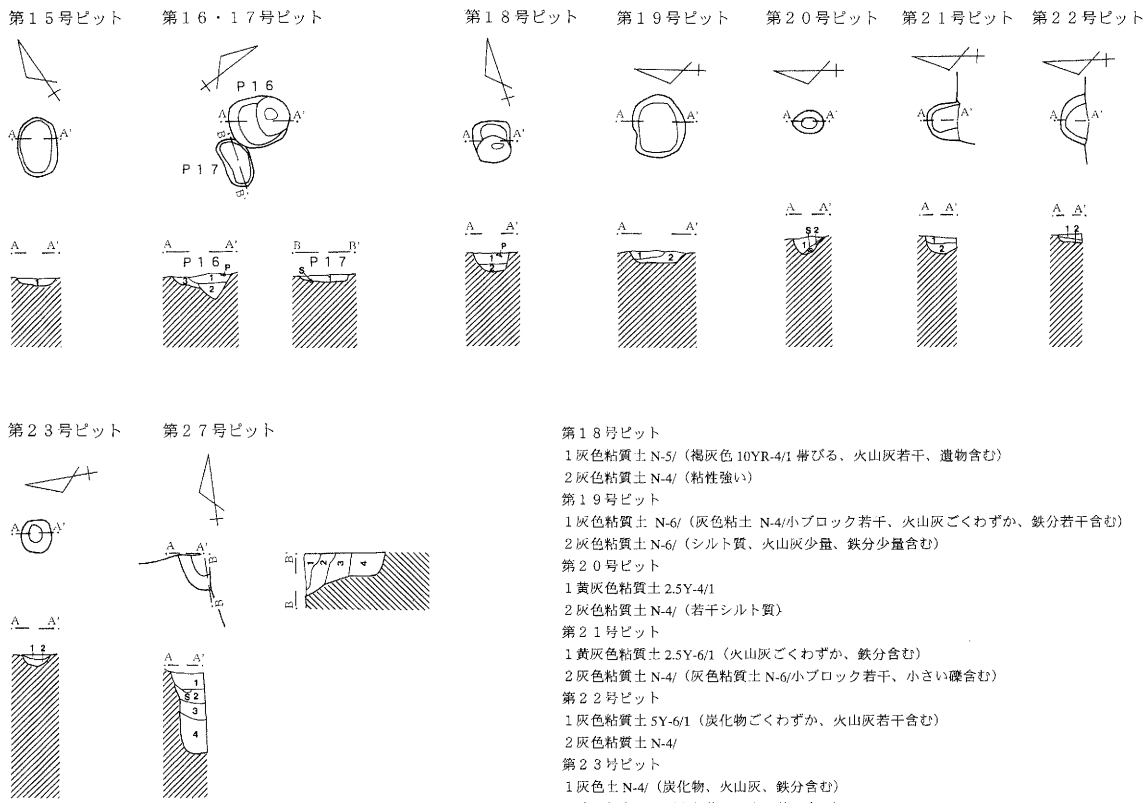
出土遺物は、土師器坏・甕・壺等の破片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、古墳時代後期が主体と考えられるが、中期の遺物も見られた。

第11号ピット（第16図・第18図）

Ｃ－２グリッドから検出した。

平面プランは不整形な隅丸方形と推定され、規模は、一方軸42cm、深さ14cmであった。一部調査区域



第１８号ピット
１灰色粘質土 N-5/（褐灰色 10YR-4/1 帯びる、火山灰若干、遺物含む）
２灰色粘質土 N-4/（粘性強い）
第１９号ピット
１灰色粘質土 N-6/（灰色粘土 N-4/小ブロック若干、火山灰ごくわずか、鉄分若干含む）
２灰色粘質土 N-6/（シルト質、火山灰少量、鉄分少量含む）
第２０号ピット
１黄灰色粘質土 2.5Y-4/1
２灰色粘質土 N-4/（若干シルト質）
第２１号ピット
１黄灰色粘質土 2.5Y-6/1（火山灰ごくわずか、鉄分含む）
２灰色粘質土 N-4/（灰色粘質土 N-6/小ブロック若干、小さい礫含む）
第２２号ピット
１灰色粘質土 5Y-6/1（炭化物ごくわずか、火山灰若干含む）
２灰色粘質土 N-4/
第２３号ピット
１灰色土 N-4/（炭化物、火山灰、鉄分含む）
２暗灰色土 N-3/（炭化物・火山灰若干含む）
第２７号ピット
１灰色粘質土 5Y-6/1（若干シルト質）
２灰色粘質土 5Y-6/1（灰白色粘質土 5Y-7/1 ブロック・黒褐色土 10YR-3/1 ブロック少量、遺物含む）
３灰色粘土 7.5Y-4/1
４灰色粘土 N-4/

第１５号ピット
１灰色粘質土 N-5/（褐灰色 10YR-4/1 帯びる、炭化物若干、鉄分若干含む）
第１６号ピット
１灰色粘質土 5Y-4/1（遺物含む）
２オリーブ黒色粘質土 5Y-3/1（若干シルト質、炭化物・焼土、遺物含む）
３灰色粘質土 10Y-4/1（若干シルト質）
第１７号ピット
１灰色粘質土 N-5/（褐灰色 10YR-4/1 帯びる、炭化物若干、火山灰ごくわずか、鉄分若干、礫含む）

0　2m
1：60

第17図　第15～23・27号ピット

外にのびている。

出土遺物は、土師器壺・甑等の破片が出土した。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第16号ピット（第17図・第18図）

D－2グリッドから検出した。遺構は第17号ピットを壊していた。

平面プランは楕円形で、規模は、長軸50cm、短軸40cm、深さ20cm であった。断面形は、二段階の掘り込みであった。

出土遺物は、土師器高坏・甕等の破片が出土し、全ピット中一番の出土量であった。

時期は、古墳時代中期と考えられる。

第18号ピット（第17図・第18図）

D－2グリッドから検出した。

平面プランは方形状で、規模は、長軸34cm、短軸31cm、深さ15cm であった。断面形は、二段階の掘り込みであった。

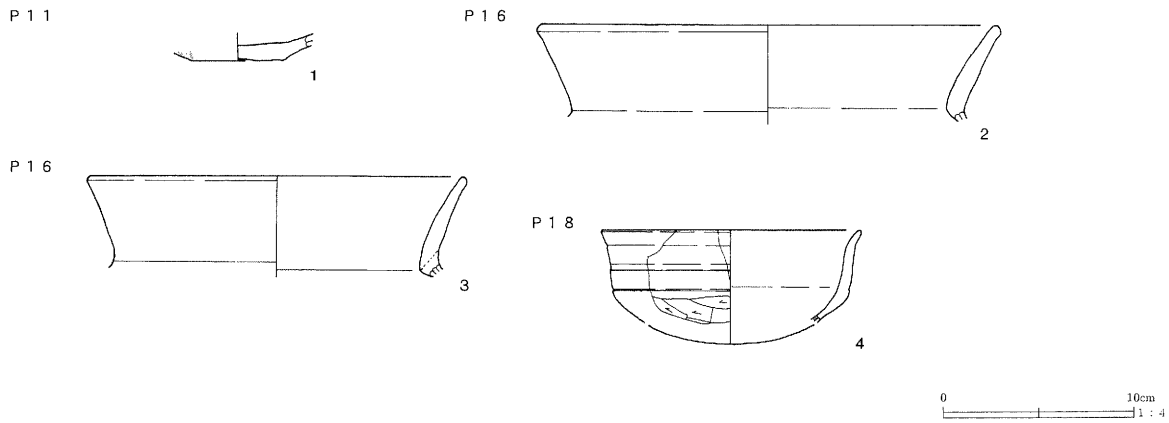
出土遺物は、土師器坏等の破片が出土した。

時期は、古墳時代後期と考えられる。

第5表　ピット一覧表（括弧付けは推定値）

番号	位　置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
1	B-2	方形	30×24×20			
2	B-2	楕円形	30×18×22	土師器甕	古墳後	
3	B-2	ほぼ円形	37×34×22	土師器坏・高坏・甕	古墳後	
4	C-2	ほぼ円形	57×54×29	土師器甕		
5	C-2	楕円形	65×(50)×24	土師器坏・甕	古墳後	
6	C-2	楕円形	51×31×26	土師器破片		
7	C-2	楕円形	50×35×16	土師器破片		
8	C-2	円形	23×23×12			P09を壊す
9	C-2	円形(隅丸方形状)	50×50×16	土師器坏・甕・壺	古墳後	P08に壊される
10	C-2	楕円形	(45)×29×15			
11	C-2	不整形な隅丸方形	42×－×14	土師器壺・甑	古墳中	
12	C-2	円形	29×25×13	土師器高坏・甕		

番号	位　置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
13	C-2	楕円形	41×26×15	土師器破片		
14	D-2	不整形	36×23×11	土師器破片		
15	D-2	楕円形	47×33×6	土師器破片		
16	D-2	楕円形	50×40×20	土師器高坏・甕	古墳中	P17を壊す
17	D-2	楕円形	40×22×5			P16に壊される
18	D-2	方形状	34×31×15	土師器坏	古墳後	
19	D-2	不整形な楕円形	50×40×10			
20	D-2	楕円形	26×17×13	土師器甕	古墳後	
21	D-2	楕円形？	－×29×13	土師器甕		
22	D-2	円形？	39×－×8	土師器細片		
23	E-2	ほぼ円形	27×24×10			
24	F-2	楕円形	(31)×25×8	土師器鉢・甕	古墳後	
25	G-2	不整形な円形	68×55×10	土師器甕		P26に壊される
26	G-2	楕円形	75×38×9	土師器高坏		P25を壊す
27	G-2	円形？	－×－×64	土師器破片		



第18図　第11・16・18号ピット出土遺物

第6表　ピット出土遺物観察表（第18図）

番号	遺構名	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	P11	壺	底径 4.9 残存高 1.4	胴部外面ヘラナデ？胴部外面周縁はヘラナデ。中央部はヘラケズリ。（中央部ヘラケズリの後、周縁のヘラナデ。） 底部は中央が若干凹み、周縁がドーナツ状を呈す。 外面赤彩。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子、長石含む	にぶい橙色 7.5 YR-6/4	良好	底部のみ	
2	P16	甕	口径 (24.0) 残存高 5.1	口縁部はヨコナデ。 口縁部は外反して直立する。口唇部は面取り状に平坦である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子含む	外面：橙色 5YR -6/8 内面：橙色 5YR -6/6	普通	口縁部の10%以下	
3	P16	甕	口径 (20.0) 残存高 5.5	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁部は外反して直立する。口唇端部は丸い。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子、雲母含む	外面：橙色 5YR -6/6、オリーブ黒色 5Y-3/1 内面：にぶい褐色 7.5YR-5/4	普通	口縁部の25%	
4	P18	坏	口径 (13.6) 残存高 5.0	口縁部内外面はヨコナデ。底部はヘラケズリ。 口縁部は段を持ってやや外反ぎみに立ち、口唇部が外反して開く。口縁部と体部との境に稜をもつ。底部は丸底と思われる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、雲母含む	外面：にぶい黄橙色 10YR-7/3、褐灰色 10YR-6/1 内面：にぶい黄橙色10YR-7/2	良好	口縁部の10%	

4　溝跡

溝跡は、調査区西部で１条検出したにとどまった。溝跡の北側・南側とも調査区域外にのびている。遺構確認が困難であったため、調査の終盤に至ってからの調査となった。出土遺物は、土師器を中心に須恵器も混じっていて、全遺構中一番の出土量をもっていた。

第１号溝跡（第19図・第20図・第21図・第22図・第23図）

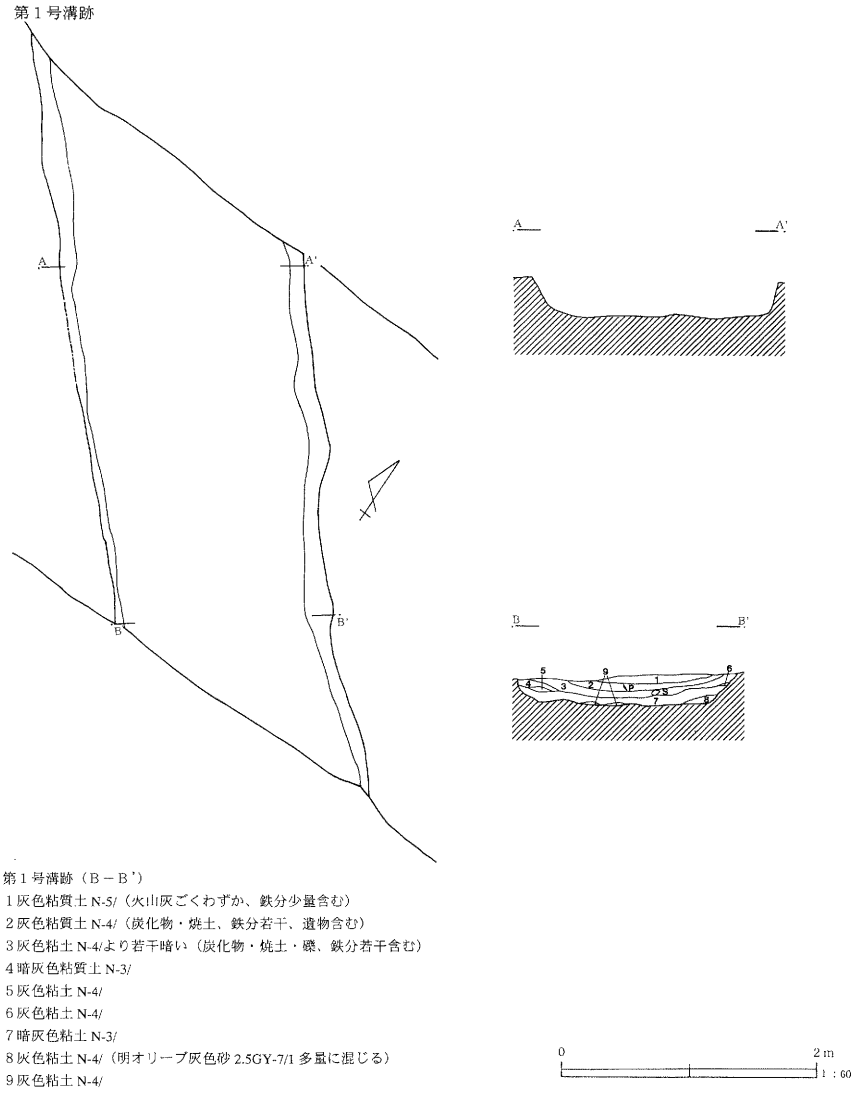
Ａ・Ｂ－１・２グリッドから検出した。調査区を北西から北東へ横断する形で検出した。

規模は、検出長4.5m、幅1.7～1.9m、深さ0.25～0.32mであった。断面形状は、扁平な逆台形であった。

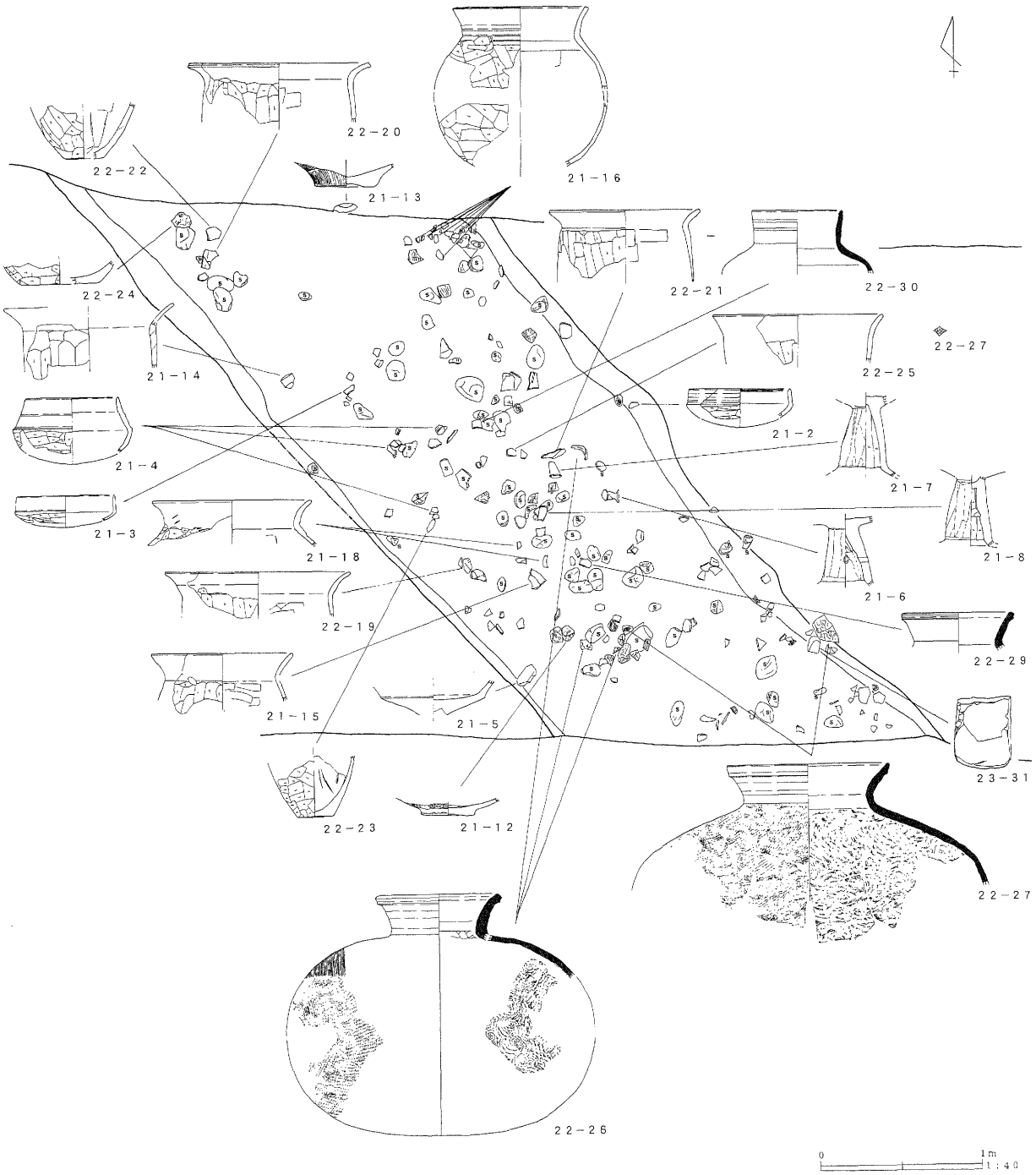
覆土中には、土器の他に礫が多量に含まれていた。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕・台付甕・壺・甑、須恵器甕・横瓶・瑳、砥石等が出土した。土師器・須恵器とも甕破片、土師器高坏の出土が目立った。

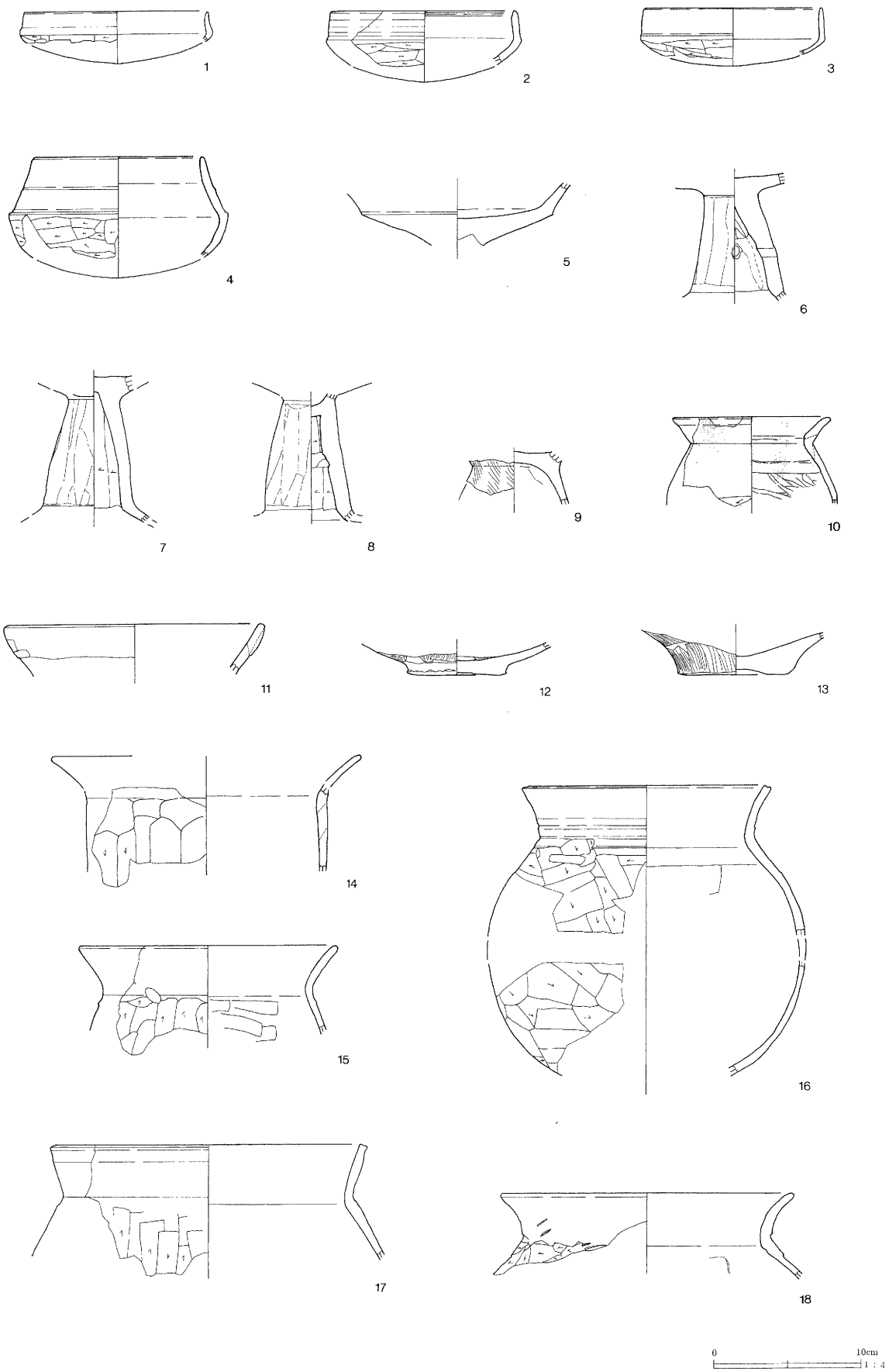
時期は、古墳時代前期から後期までの遺物を出土しているが、中期から後期の時期が主体と考えられる。



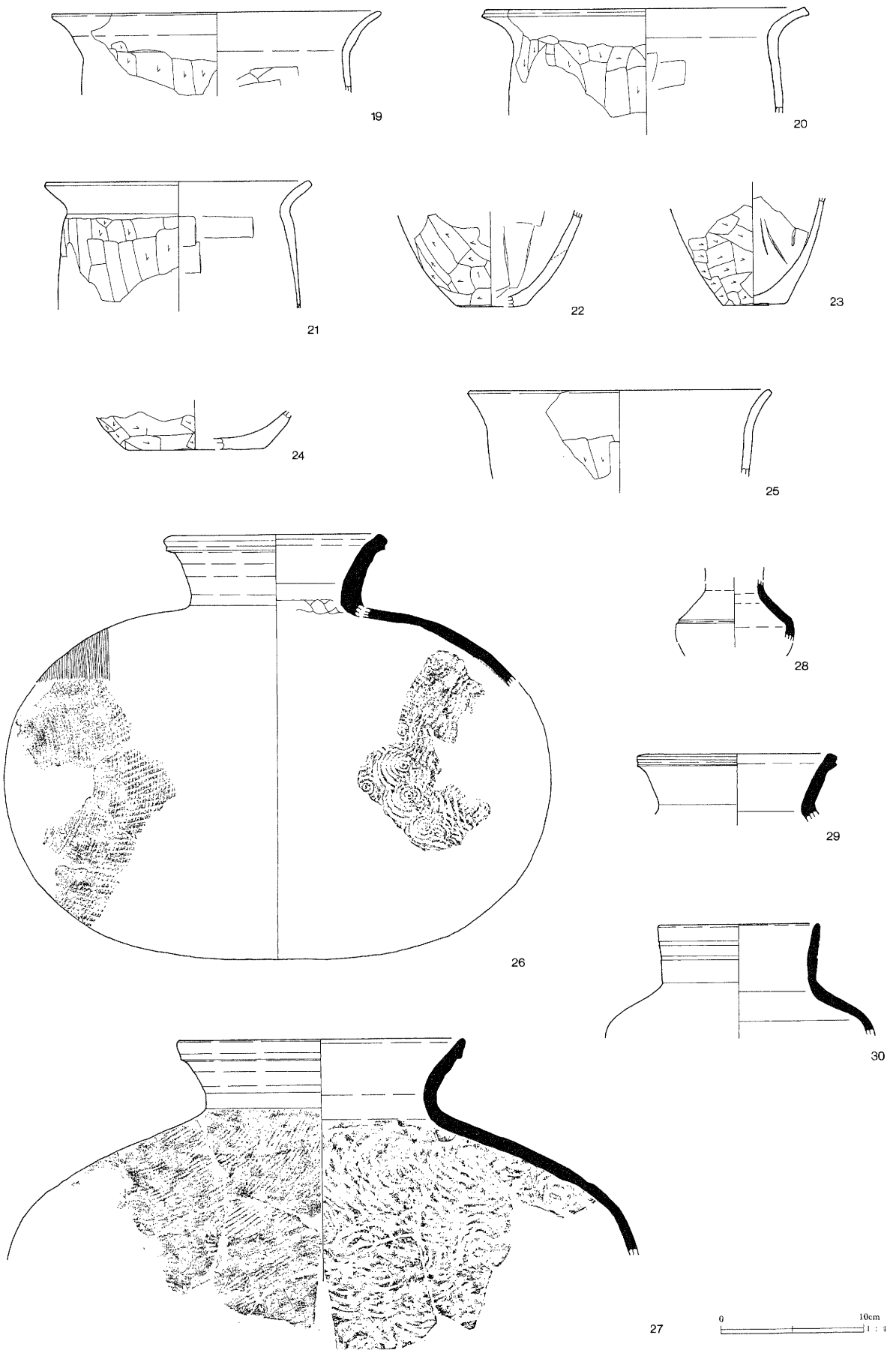
第19図　第１号溝跡



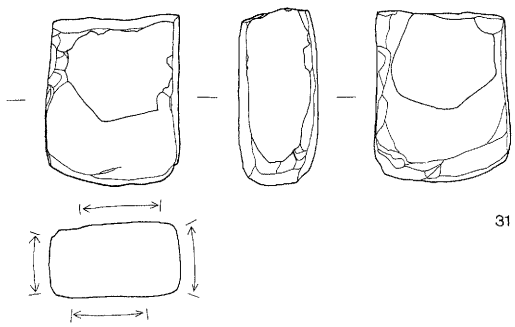
第20図　第１号溝跡遺物分布図



第21図　第１号溝跡出土遺物(1)



第22図　第１号溝跡出土遺物(2)



第23図　第１号溝跡出土遺物(3)

第７表　第１号溝跡出土遺物観察表（第21・22・23図）

番号	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	坏	口径(12.5) 残存高 2.1	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部はやや内傾して立ち上がる。底部は丸底と思われる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫(¢2mm)、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:橙色 7.5YR-6/6、口唇部付近は灰色 N-6/ 内面:灰色 N-7/、一部橙色 7.5YR-6/6	不良	口縁部の25%	内面にススが付着。
2	坏	口径(12.7) 残存高 3.7	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラズリ。 口縁部は若干内傾ぎみに立つ。わずかな段がある。内面の口唇部近くに凹みをもつ。 口縁部と底部との境に稜をもつ。底部は丸と思われる。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-6/3 内面:にぶい黄橙色10YR -6/3	普通	口縁部の15%	
3	坏	口径(12.0) 残存径 3.2	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。底部内面はナデ。 口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁部と底部との境に稜をもつ。底部は丸底と思われる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	にぶい橙色 7.5YR-7/3	普通	口縁部の30%	内面の一部にスス付着。
4	坏	口径 11.4 残存高 6.9	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ。体部内面はヨコナデ。 口縁部中間に段をもち、体部との境に稜をもつ。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい赤褐色 5YR-5/3・5YR-5/4 内面:にぶい赤褐色 5YR-5/3、褐灰色 5YR-4/1	良好	口縁部の50%	
5	高坏	－	坏部口縁部は内外面ヨコナデ。稜から下はナデ(ヘラナデ?)。坏部内面はナデ(ヘラナデ?)。 口縁部は外反して直線的に開く。坏部上半と下半との境に稜をもつ。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:橙色 5YR-6/6 内面:橙色 7.5YR-6/6	良好	坏部の50%	
6	高坏	残存高 8.4	脚部外面はタテナデ。内面は断続的なヘラケズリ整形痕及び工具痕あり。 やや短い脚部で直交する４方向に直径6～7mmの穿孔あり。脚部の裾は比較的広い。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-5/3、一部灰褐色 7.5YR-4/2 内面:にぶい赤褐色 5YR-4/3	普通	脚部の90%	
7	高坏	残存高 10.0	脚部外面はタテナデ。脚部内面は断続的なヘラケズリによる整形。 脚部は中央がやや膨らむ。台部はハの字に開く。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	にぶい橙色 7.5YR-6/4 一部黒褐色2.5Y-3/1	良好	脚部の90%	
8	高坏	残存高 8.6	脚部外面はタテ及びナナメのナデ。脚部内面は断続的なヘラケズリ(切)整形。 中央がややふくらむ直線的な脚部である。幅も比較的細い。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子含む	にぶい橙色 7.5YR-6/4	良好	脚部の90%	

番号	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
9	台付甕	残存高 3.7 台部狭部幅 5.9	脚部外面にナナメ刷毛を間隔をおいて左回りに施す。脚部内面及び胴部内面は木口状工具によるナデ。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 5YR-7/4、浅黄橙色 7.5YR-8/3 内面:灰黄褐色 10YR-6/2	普通	台部の一部	胴部内面にスス付着。
10	壺	口径(10.8) 残存高 5.9	口縁部の内外面はヨコナデ。胴部外面上半はナデ(ミガキ状)。胴部外面下半はヘラケズリ。胴部内面上半はヨコナデ。胴部内面下半はヘラ状工具でナナメナデ。 口縁部はくの字に外反する。体部は丸味をもつ。赤彩か?	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒、赤褐色粒子、雲母含む	外面:明赤褐色 2.5YR-5/6 内面:にぶい赤褐色2.5YR-4/4	良好	口縁部の20%	
11	壺	口径(17.8) 残存高 3.4	口縁部外面はナデ。口縁部内面はナデ。 二重口縁。口唇部は平坦である。	細粒砂多量、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、小石含む	橙色 5YR-6/6 にぶい橙色 7.5YR-7/4	良好	口縁部の10%以下	
12	壺	底径 6.9 残存高 2.2	胴部外面は刷毛が施される。底部外面は未調整。底部内面は刷毛が施される。底部から外部へは大きく開いて緩やかに立ち上がる。底部外面中央はわずかに凹み、ドーナツ状を呈す。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫(¢3㎜大)、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、長石含む	外面:黒色 7.5Y-2/1 内面:にぶい黄橙色 10YR-6/3	普通	底部破片	内面に黒斑あり。
13	壺	底径 7.5 残存高 2.8	胴部外面は底部付近は刷毛が施され、その上はヘラミガキ。底部外面の周縁はヘラケズリ。底部内面は刷毛が施されるが、器面が粗くあまり残っていない。 底部外面中央は凹み、ドーナツ状を呈す。胴部は底部から外反して開く。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫(¢2〜4㎜)、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、石英、長石含む	外面:橙色 5YR-7/6、にぶい黄橙色10YR-7/4、灰黄褐色10YR-5/2、黒褐色 2.5Y-3/1 内面:灰色 5Y-4/1、オリーブ黒色 7.5Y-3/1	不良	底部破片	器面粗い。外面にスス付着。
14	甕	胴部径(11.5) 残存高 6.0	内外面とも器面が粗く調整が読みとれないが、外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はナデられていると思われる。粘土紐の継ぎ目痕あり。 胴部はほぼ垂直におりるようである。	細粒砂、中粒砂多量、粗粒砂、細礫、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:にぶい黄橙色10YR-7/3、にぶい橙色 2.5YR-6/4、灰色 N-4/ 内面:にぶい黄橙色10YR-6/3	不良	胴部破片	器面粗い。
15	甕	口径(17.6) 残存高 6.1	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。胴部内面はヨコナデ。 口縁部はくの字に開く。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	にぶい黄橙色 10YR-7/3	普通	口縁部の15%	
16	甕	口径 17.0 頸部径 14.6 残存高 10.4	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。胴部内面はヘラナデ。 口縁部は3箇所段を持ち、緩やかなくの字を呈して開く。口縁部は平坦で中央に溝をもつ。胴部は丸みを持つ。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子含む	外面:浅黄橙色 10YR-8/4、にぶい橙色 7.5YR-7/4、にぶい黄橙色 10R-7/2 内面:口縁端部付近のみ灰黄褐色 10YR-6/2外は黒色N-1.5/	普通	全体の30〜40% 口縁部の50%	
17	甕	口径(21.6) 残存高 7.9	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。胴部内面は器面が粗く調整不明。 口縁部はやや外反し直線的に開く。口唇部は平坦である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫(¢2〜4㎜)、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:浅黄色2.5Y-8/4 内面:黄灰色2.5Y-6/1	不良	口縁部の10%	
18	甕	口径(20.0) 残存高 6.0	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヨコ方向のヘラケズリ。胴部内面はヨコ方向のヘラナデ。 口縁部は外反してくの字を呈す。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、長石、黒雲母含む	にぶい黄橙色 10YR-7/2、褐灰色 10YR-4/2	良好	口縁部の25%	

番号	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
19	甕	口径(23.2) 残存高 5.7	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。胴部内面はヨコヘラナデ（木口状工具による？）。 口縁部は大きく外反して開く。胴部は直立する。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、長石、小石多量に含む	灰黄色 2.5YR-6/2、にぶい黄褐色 10YR-5/3	普通	口縁部の15%	
20	甕	口径(22.6) 頸部径(18.6) 残存高 7.5	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。胴部内面はヨコ方向のヘラナデ。 口縁部が大きく外反する。口唇部は平坦で中央に溝をもつ。胴部はほぼ直線におりる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	にぶい黄橙色 10YR-6/3	不良	口縁部の25%	
21	甕	口径(18.8) 残存高 9.0	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。胴部内面はヨコ方向のヘラナデ痕あり。 肩部と頸部との間に段をもち、口縁部は外反してくの字状を呈する。口唇部は平坦である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、石英、長石含む	外面:浅黄橙色 10YR-8/3 内面:明黄褐色 10YR-7/6	良好	口縁部の25%	
22	甕	底径(5.0) 残存高 6.7	胴部及び底部外面はヘラケズリ。胴部内面はヨコ方向のヘラナデ。 底部は平底と思われる。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-6/4 内面:にぶい橙色 7.5YR-7/4	普通	底部付近の25%	器面粗い。
23	甕	底径 4.5 残存高 7.5	胴部外面及び底部外面はヘラケズリ。胴部内面及び底部内面はヘラナデ。 底部は平底。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:にぶい黄褐色 10YR-5/3、にぶい黄橙色 10YR-7/2 内面:黒褐色2.5Y-3/1	普通	底部の70%	外面に黒斑あり。
24	甕	底径(9.8) 残存高 2.7	外面はヘラケズリ。内面はナデ。 胴部は底部からやや内湾ぎみに開いて立ち上がる。 底部は平底。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂(φ4mm)、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子、石英、長石、雲母含む	外面:灰黄色 2.5Y-6/2、明赤褐色 2.5YR-5/6、灰褐色 7.5YR-5/2 内面:灰黄褐色 10YR-6/2	普通	底部の40%	
25	甑	口径(21.4) 残存高 6.2	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。 口縁部は緩やかに外反し開く。胴部は直立する。	細粒砂、中粒砂多量、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、長石含む	にぶい黄橙色 10YR-7/3	普通	口縁部の15%	
26	横瓶	口径(15.7) 頸部径(11.9) 胴部最大径(24.7) 胴部長(38.3)	口縁部内外面は回転ナデ。頸部直下はナデが施される。胴部外面は平行叩きが施される。胴部内面は同心円の当て具痕が残り、凹凸が激しい。側端部は回転カキ目。 口縁部は鳥頭状を呈す。口唇部は平坦である。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子雲母含む	外面:灰色N-6/・N-5/ 内面:灰色N-6/	良好	口縁部の30%及び胴部破片	内面は剥離が激しい。器形の一部から推定復元実測した。
27	甕	口径(20.3) 頸部径(16.3) 残存高 15.3	口縁部内外面は回転ナデ。胴部外面は平行タタキが施される。胴部内面は円心円あて具痕が残り、凹凸が激しい。 口縁部は崩れた鳥頭状を呈す。口唇部は丸い。外反して開く。胴部はなで肩である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	灰黄色 2.5Y-6/2	不良	口縁部から胴部上半にかけての25～30%	
28	壺	胴部径(9.3) 残存高 4.4	ロクロ成形。回転ナデ。沈線は端部の丸い棒状工具でつけられたと思われる。 頸部から胴部へはフラスコのような形態を呈している。上段に区画が1条の沈線によってなされている。区画内は無文。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子、石英含む	灰色N-6/	良好	胴部破片	
29	横瓶	口径(14.0) 残存高 4.8	ロクロ成形。口縁部内外面は回転ナデ。 口縁部は外反して開く。口縁端部は鳥頭状を呈す。口唇部はやや丸みをもつ。	細粒砂、中粒砂、細礫(φ2mm)、白色粒子、赤褐色粒子、石英含む	灰色N-6/	良好	口縁部の15%	
30	短頸壺	口径(11.4) 頸部径(10.8) 残存高 8.0	ロクロ成形。内外面とも回転ナデ。 口縁部は直立し、2条の沈線がめぐる。頸部と胴部の境にも沈線がめぐる。肩はやや張って下へとおりる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子含む	外面:灰白色5Y-7/1、一部灰色 5Y-6/1 内面:灰白色2.5Y-7/1	良好	口縁部の15%	

番号	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
31	砥石	長さ 9.1 幅 7.0 厚さ 4.0 重さ 463 g	平面が長方形のもの。短辺の一方は欠損している。4面に砥ぎ面があり、かなり平滑である。 石質は砂岩。					

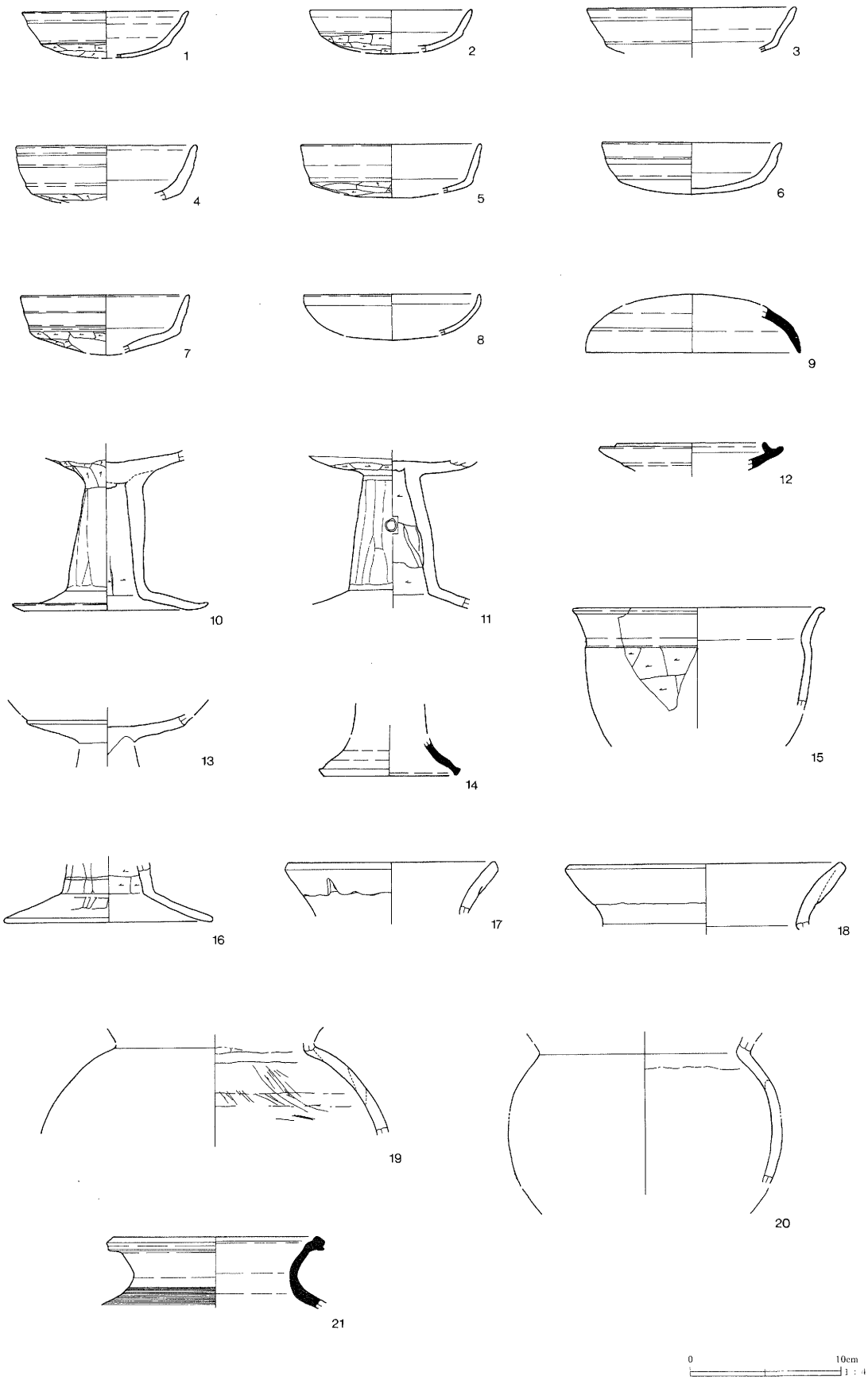
5 グリッド出土遺物

遺構に伴わない遺物包含層中の遺物をグリッド出土遺物として掲載する（第24図・第25図）。

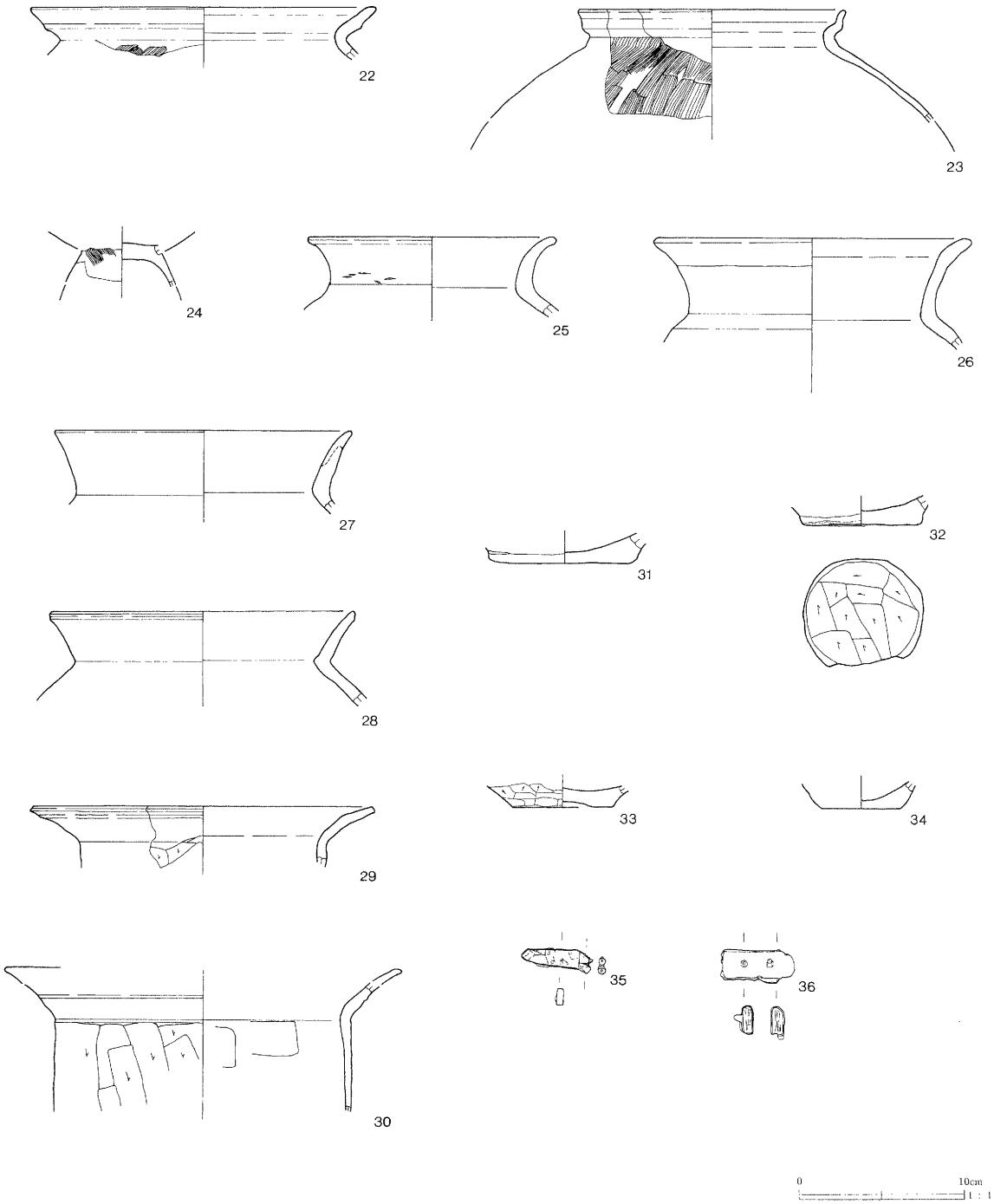
グリッド出土遺物は、C－2・F－2グリッドに多く出土をみた。土師器坏・高坏・鉢・甕・台付甕・壺、須恵器坏・甕、鉄製品等が出土し、時期も古墳時代前期から後期までの所産であった。

第8表　グリッド出土遺物観察表（第24・25図）

番号	グリッド	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	F-2	坏	口径(11.0) 残存高 3.1	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部は段を持ち、外方へ開く。口縁部と底部との境に稜をもつ。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、石英、雲母含む	灰白色 10YR-8/2、褐灰色 10YR-4/1	普通	40%	器面脆弱。
2	E-2	坏	口径(10.8) 器高 2.9	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ。 口縁部は中央に稜をもち、外方へ開く。口縁部と底部との境に稜をもつ。 底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	にぶい黄橙色 10YR-7/2	良好	20%	黒斑あり。
3	F-2	坏	口径(14.0) 残存高 3.0	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部は段をもち外方へ開く。口縁部と底部との境に稜がある。	細粒砂、中粒砂、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-7/4 内面:橙色 7.5YR-7/6	不良	口縁部の10%	
4	F-2	坏	口径(12.0) 残存高 3.6	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。 口縁部は段をもち外方に開く。口縁部と底部との境にゆるやかな稜をもつ。	細粒砂、中粒砂、雲母多量に含む	外面:橙色 5YR-6/6 内面:浅黄橙色 10YR-8/3	良好	口縁部の15%	
5	F-2	坏	口径(12.1) 残存高 3.3	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ。 口縁部はやや外方へ開く。ゆるやかな段をもち、口縁部と底部との境に稜をもつ。底部はゆるい丸底。	細粒砂、中粒砂、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:明赤褐色 2.5YR-5/8、橙色 7.5YR-7/6 内面:橙色 5YR-6/8、にぶい褐色 7.5YR-5/4	普通	15% (口縁部の20%)	
6	F-2	坏	口径 12.0 残存高 3.4	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ？、内面はナデ？（底部内外面の器面がもろくて不明。） 口縁部は段をもち、外方へ開く。口縁部と底部との境に稜をもつ。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、赤褐色粒子含む	橙色 5YR-6/8、橙色 7.5YR-7/6	不良	10%以下	脆弱
7	F-2	坏	底部(11.2) 残存高 3.9	口縁部内外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ。 口縁部はやや外方へ開き、わずかな段をもち、口縁部と底部との境に稜をもつ。底部は直線的に中心に向かってナナメにおりていく。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい赤褐色2.5YR-4/4 内面:橙色 2.5YR-6/8	良好	20%	外面に黒斑あり。
8	E-2	坏	口径(11.6) 残存高 2.7	器面が脆弱で摩滅が激しく調整は不明。口縁部は直立する。底部は丸底である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂含む	橙色 5YR-6/8	不良	20%	器面摩滅。
9	F-2	坏蓋	口径(14.2) 残存高 3.1	ロクロ成形。ロクロナデ。 口縁部はやや外方へ開く。口縁部と体部との境にゆるやかな稜をもつ。	細粒砂、中粒砂、白色粒子含む	灰白色 5Y-7/1	不良	口縁部の10%	



第24図　グリッド出土遺物(1)



第25図　グリッド出土遺物(2)

番号	グリット	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
10	B-2	高坏	脚径 13.0 残存高 10.6	坏部外面は脚部との接合箇所からタテ方向のヘラケズリ。内面はナデ。 脚部柱状部外面はタテ方向のナデ。 内面は断続的なヘラによる整形。裾部内外面はナデ。 柱状の脚部に屈折して開いた裾部をもち、先端はやや上方に跳ね上がる。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、長石含む	明赤褐色 2.5YR-5/6 脚部内面:明赤褐色2.5Y-5/6、灰黄褐色 10YR-6/2	良好	60%	脚部裾部の内面に黒斑あり。
11	C-2	高坏	残存高 10.2	坏部外面の稜より下はヘラケズリ。 内面はナデ。脚部外面はタテ方向のナデ。脚部内面は断続的なヘラケズリによる整形。中間にケズリの際のバリが残存。 坏部は稜をもつ。脚部はやや長めの下方の幅が大きい柱状部に屈折して大きく開いた裾部をもつ。脚部中央1箇所に穿孔があるが貫通していない。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子含む	外面:橙色 5YR-6/6、にぶい黄橙色10YR-7/2 内面:オリーブ黒色 5Y-3/1、にぶい黄橙色 10YR-7/2	良好	脚部の80%	外面に黒斑あり。
12	A-2	坏身	口径 (9.8) 残存高 1.5	ロクロ成形。回転ナデ。 口縁部に受け部がつき、口縁は内傾する。口唇部は丸い。自然釉がかかる。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子含む	灰白色N-7/、	良好(堅緻)	口縁部の20%	
13	C-2	高坏	—	外面は指ナデ。稜の部分はヨコナデ。 内面はヘラナデ? 坏部には上半との境に稜をもつ。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい橙色 5YR-6/4、褐灰色10YR-4/1 内面:にぶい褐色 7.5YR-6/3	良好	坏部下半破片	
14	C-2	高坏	脚径 (9.4) 残存高 2.5	ロクロ成形。ロクロ回転ナデ。 脚部裾部は大きくやや内湾ぎみに開き、口唇部は上下方につまみ出す。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子含む	灰色 N-6/	良好	脚裾部の10%	
15	F-2	鉢	口径 (16.8) 残存高 6.9	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ? 口縁部はやや外反する。口縁端部は外方へ屈曲する。体部はやや内湾しながらおりる。	中粒砂、粗粒砂、細礫、赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい黄橙色10YR-6/3 内面:にぶい橙色 7.5YR-7/3、にぶい褐色 7.5YR-5/3	良好	口縁部の15%	外面に黒斑あり。
16	C-2	高坏	脚径 (13.9) 残存高 3.9	脚部外面はナデ、内面はヘラケズリ。 裾部内外面はヘラナデ。 裾部は大きく屈曲して開く。	中粒砂、粗粒砂、細礫(φ3mm)、白色粒子、雲母含む	外面:明赤褐色 2.5YR-5/6、一部灰黄褐色 10YR-6/2 内面:明赤褐色 2.5YR-5/6	良好	裾部の10%	
17	C-2	壺	口径 (14.3) 残存高 3.5	口縁部はヨコナデ。 口縁部は大きく開く二重口縁?口唇部は平坦である。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子赤褐色粒子、雲母含む	外面:にぶい赤褐色 5YR-5/4 内面:明赤褐色 2.5YR-5/6	良好	口縁部の15%	
18	C-2	壺	口径 (18.6) 頸部径(13.7)	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁部は屈曲して大きく開く二重口縁。 口唇部は平坦である。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、長石、石英、雲母含む	外面:灰褐色7.5YR-6/2 内面:にぶい橙色 5YR-6/3	良好	口縁部の10%以下	器面若干粗い。
19	B-2	壺	頸部径(13.2)	胴部外面はヘラナデ?、内面はヘラナデの痕跡残る。粘土輪積み痕残る。 胴部は球形。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、長石、雲母含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-5/4 内面:灰褐色7.5YR-4/2、黒色 10YR-2/1	良好	胴部上半の20%	外面に黒斑あり。
20	D-2	壺	頸部径(14.0) 胴部最大径 (18.3) 残存高 (9.8)	口縁部内外面はヨコナデ?胴部外面はミガキ?胴部内面はナデ。 口縁部は外方へ屈曲して開くと思われる。胴部は丸い。	中粒砂、粗粒砂、細礫多量、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	外面:橙色 2.5YR-6/6、にぶい黄褐色 10YR-7/2 内面:橙色 2.5YR-6/6、褐灰色 7.5YR-4/1	普通	胴部上半破片	

番号	グリット	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
21	B-2	甕	口径(14.5) 残存高 4.9	ロクロ成形。口縁部内外面は回転ナデ。胴部外面はカキ目。 口縁部は鳥頭状を呈し、外反して開く。口唇部は平坦である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子含む	外面:青灰色5PB-5/1 内面:明青灰色5PB-7/1、暗灰色 N-3/	良好(堅緻)	口縁部の30%	
22	C-2	台付甕	口径(21.0) 残存高 3.3	口縁部内外面はヨコナデ。体部は刷毛が施される。 口縁はくずれたS字状を呈す。やや厚め。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:橙色 5YR-6/6、にぶい橙色 7.5YR-7/4 内面:灰白色 2.5Y-7/1、橙色5YR-6/6	良好	口縁部の20%	
23	C-2	台付甕	口径(16.4) 残存高 6.9	口縁部内外面はヨコナデ。頸部、肩部外面はタテ方向の刷毛目。頸部内面に指ナデ痕あり。肩部内面はナデ。 S字状口縁。口縁部はやや外方に広がり端部は丸くおさまる。口縁部内面は明瞭な稜をもつ。	中粒砂、粗粒砂、白色粒子、赤褐色粒子多量、雲母含む	外面:にぶい橙色 7.5YR-7/4 内面:にぶい黄橙色10YR-6/4	普通	口縁部から肩部の20%	
24	C-2	台付甕	—	脚部外面は細かい刷毛が施されている。脚部内面はナデ。体部内面はナデ。 内湾ぎみに開く脚部をもつ。	細粒砂、中粒砂多量、粗粒砂、白色粒子多量、黒色粒子、褐色粒子、長石、雲母含む	外面:赤色10YR-5/6 内面:橙色2.5YR-6/8、灰褐色 7.5YR-5/2	普通	脚部の50%	
25	D-2	壺	口径(15.2) 頸部径(12.4) 残存高 4.8	口縁部内外面はナデ。胴部はヘラケズリ? 口縁部は大きく外反する。	細粒砂、中粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、雲母含む	外面:赤褐色10R-5/4、にぶい褐色 7.5YR-5/3 内面:赤褐色 10R-6/4、灰黄褐色10YR-6/2	良好	口縁部の20%	
26	C-2	壺	口径(19.3) 頸部径(15.0) 残存高 7.0	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラナデ?胴部内面はナデ。 口縁部はゆるやかに外反し、二重口縁状を呈す。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子含む	橙色 7.5YR-6/6	良好	口縁部の10%以下	
27	C-2	甕	口径(18.1) 頸部径(15.4) 残存高 5.1	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁部は外反して立つ。	中粒砂、粗粒砂、細礫(¢3mm)、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、長石、雲母含む	外面:にぶい赤橙色2.5YR-4/4 内面:にぶい橙色 7.5YR-6/4	良好	口縁部の15%	
28	C-2	甕	脚径(18.6) 残存高 5.8	口縁部内外面はヨコナデ。 口縁部は外反し、くの字状を呈する。 端部は崩れた鳥頭状を呈す。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、長石、雲母含む	外面:にぶい褐色 7.5YR-5/4、 内面:明赤褐色5YR-5/6	良好	口縁部の15%	外面に黒斑あり。
29	F-2	甕	口径(21.0) 残存高 3.9	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。 口縁部は大きく開く。口唇部に凹みがあり平坦である。胴部はほぼ垂直におりる。	中粒砂、粗粒砂、細礫(¢5mm 角礫)、白色粒子、長石含む	外面:灰褐色 7.5YR-4/2 内面:灰黄褐色10YR-5/2	良好	口縁部の15%	
30	E-2	甕	頸部径(18.0)	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はタテ方向のヘラケズリ。内面はヨコ方向のヘラナデ。 口縁部は大きく外反する。胴部はほぼ垂直におりる。	中粒砂、粗粒砂、白色粒子、赤褐色粒子含む	外面:橙色 7.5YR-6/6、にぶい褐色 7.5YR-5/4 内面:にぶい黄橙色10YR-7/4	普通	胴部上半破片15%	
31	D-2	壺	底径 9.0 残存高 1.9	底部外面はヘラケズリ。胴部の底部直上はヘラ状工具によるナデ圧痕残る。 底部内面はナデ。 底部は平底。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子多量、黒色粒子、赤褐色粒子、長石、雲母含む	外面:明赤褐色2.5YR-5/6 内面:にぶい褐色 7.5YR-6/3	良好	底部の95%	

番号	グリット	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
32	C-2	壺	底径 7.0 残存高 1.9	底部外面はヘラケズリ。底部内面は指ナデ。体部外面は指ナデ。 底部は平底。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂多量、細礫(¢4mm)多量、白色粒子、黒色粒子、褐色粒子、雲母含む	明褐色 2.5YR-5/6、にぶい赤褐色 5YR-5/4	普通	底部破片	器面粗い。底部内面にスス付着。
33	C-2	壺	底径 6.2 残存高 1.3	底部周縁はヘラケズリ。中央はナデ。胴部の底部直上はヘラ状工具のナデ。それより上はヘラケズリ。底部内面はヘラナデ。 底部はあげ底でドーナツ状である。	細粒砂、中粒砂、粗粒砂多量、細礫(片岩)多量、白色粒子、黒色粒子、石英、雲母含む	外面:橙色 5YR-6/6、にぶい黄橙色10YR-6/3 内面:黒褐色10YR-3/1	良好	底部の70%	
34	C-2	甕	底径(4.7) 残存高 1.7	体部外面はナデ。底部外面はヘラナデ。内面はナデ。 底部は平底。	中粒砂、粗粒砂、細礫、白色粒子、赤褐色粒子、長石、雲母含む	外面:明赤褐色 5YR-5/6 内面:にぶい橙色 7.5YR-6/4	良好	底部の40%	外面に黒斑あり。
35	E-2	鉄製品	長さ 3.4 最大幅 1.2 厚さ 5.0	刀子の先端状の鉄製品。切先状の端から3.6cmの所に段をもち、2本筒を束ねたような形状のものが接続する。					用途不明。
36	E-2	鉄製品	長さ 4.4 幅 1.7 厚さ 0.8 突起高 0.4 突起径 0.4	長楕円の筒状製品。片面の2箇所に凸型の突起がつき、断面は先端が隅丸である。筒はU字状で全周せず接しない。					用途不明。

V 調査のまとめ

前中西遺跡は、沖積扇状地である新荒川扇状地の縁辺部上に立地し、遺跡の継続時期も弥生時代中期（須和田式期）から平安時代までと長期にわたる遺跡である。本遺跡は、上之地区の土地区画整理事業に伴う事前の試掘調査によって知られるところとなったのは前述したが、今回の調査とは別に土地区画整理事業に伴って熊谷市教育委員会が3回発掘調査を行っている。

1回目は平成8年度に調査され、弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代前期の住居跡2軒、古墳時代後期の住居跡7軒、古墳時代前期から後期にわたる祭祀が行われた竪穴状遺構3基、古墳時代後期から平安時代にわたる祭祀土器溜まり遺構1基、平安時代の住居跡1軒・掘立柱建物跡7棟等が検出されている。弥生時代後期の住居跡からは、樽式の片口鉢等の土器の他に環状石斧・磨製石鏃等の石製品が出土している。古墳時代全般にわたっての祭祀竪穴状遺構では、多数の土器と伴に剣形滑石製模造品、管玉・臼玉・土製の玉等の玉類が出土しており、隣接する土壙内では多数の馬歯が出土し、水辺の祭祀に関わる犠牲馬の可能性も考えられる。この水辺の祭祀に関しては、遺跡内で微高地及び低湿地の旧地形が確認され、この低湿地に望む微高地において古墳時代後期から平安時代にわたって連綿と祭祀が行われていたと推測している。また、低湿地に土器等を投げ入れた祭祀跡が土器溜まりとして検出される形でも確認された。一方、掘立柱建物跡の柱穴からは瓦も検出されたことから、瓦葺き建物の存在の可能性が想定され、この地が平安期には特別な性格をもった地区であったとも考えられる。

2回目は平成9年度に調査され、弥生時代中期の再葬墓5基・方形周溝墓3基・住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の溝跡1条・掘立柱建物跡2棟等が検出されている。弥生時代中期（須和田式期）の再葬墓と方形周溝墓が検出されたのは特筆すべきことで、関東地方北部須和田式期の再葬

墓から方形周溝墓導入への墓制の過渡期的様相が窺える好資料として評価できる。住居跡は、焼失住居で焼土と炭化物で覆われていた。また、平安時代の溝跡は、平成８年度調査の掘立柱建物跡群と関連して、これらの建物群で構成される集落を区画する溝と考えられ、Ｌ字に屈曲する部分が確認されている。

そして、３回目は今回の調査の後に調査されている平成10年度の調査であるが、まだ調査中であるので、ここでは割愛させていただくことにする。

さて、今回の調査では、遺構は竪穴遺構６基、土坑６基、ピット27基、溝跡１条、遺物は土師器を中心に須恵器を検出し、時期は古墳時代後期を中心に、古墳時代前期から後期までの時期であった。いずれの遺構も中期から後期が主体で、特に唯一の溝跡である第１号溝跡からは前期の遺物も見られ、遺物包含層中でも前期から後期にわたる遺物が出土している。つまり、古墳時代全般にわたる資料を提供できた調査であった。調査区は、位置的に見ると前述の第１回・第２回の調査区のすぐ南にあたり、遺跡範囲の南端に位置する。南には、やはり弥生時代中期の土器が出土している平戸遺跡が存在し、ちょうど弥生時代の遺構検出区に挟まれた形になっている。

ところで、今回の調査において特殊な遺物としては、石製紡錘車（第12図の８）と須恵器の転用硯（第13図の14）が挙げられる。そこでこの石製紡錘車及び転用硯について若干まとめて本稿のまとめに代えたいと思う。では、最初に転用硯から述べていくことにする。

転用硯は第４号竪穴遺構から多量の坏等の土師器と伴に出土したものである。須恵器の甕片を丸くし、端部を丁寧に面取りし作られたもので、残念ながら欠損箇所が見られ全体像は把握できないが現存形でポケット状を呈している。細かい平行タタキ目痕の残る面を硯面として使用したようで墨が若干残存している。もう一方の面は同心円のあて具痕が明瞭に残っている。本遺構は出土した土師器から７世紀後半から８世紀初頭の時期が適当と考えられ、ちょうど出挙木簡を出土した行田市小敷田遺跡第97号土壙と同様の時期であることが思い出される。この土壙の木簡の存在は、字の存在が認識でき、また本遺跡の須恵器甕を転用した硯の存在も字の存在を想定することができる。つまり共通して字の存在を認めることができる。このことから本遺物は、本遺跡における識字人物の存在をも想定できるという興味深い遺物であると言える。

ところで本遺跡は、小敷田遺跡とも直線にして約２kmという距離関係にある。また、古代律令期における郡域としては、当地区は「大里郡」として考えられ、小敷田遺跡も同郡内の遺跡としての共通点がある。そしてさらに、水系においても両者とも忍川水系下の遺跡という共通点を持ち合わせていることに注目したい。当時、土地利用での水田開発に際し用排水の確保は重要なポイントであり、その水路を統制・掌握すると言うことは生活基盤である農業生産の安定につながることと考えられ、その人物の存在が考えられている。こういった意味でも同じ水系下にあると言うことは、支配関係はともかくとして相互に共通性があるのではないかと考えたい。さらには、小敷田遺跡が官衙的要素を示すこと、前述のとおり本遺跡が瓦葺き建物群の存在を想定させる様相をもちあわせていること、そして両者に挟まってやはり一般集落とは様相が異なる特殊性をもつ諏訪木遺跡の存在と、当地域はかなり興味深い問題を提起している遺跡の存在が目を引くなど、この転用硯がいろいろな角度から当地域を見ていくきっかけとなる遺物でもあると考える。

それでは次に、もう１つの特殊遺物である石製紡錘車について若干まとめてみたいと思う。

本遺跡で出土した紡錘車は、第２号竪穴遺構から若干の土師器と伴に検出され、時期は土師器から古墳時代後期と考えられる。紡錘車は、承知のとおり回転運動によって繊維に撚りをかけて糸を作る道具である紡錘（つむ）の紡輪で回転に惰性を与えるおもりである。そして、紡錘はこれと中心を貫通する紡茎というパーツからなる。紡輪は土製、骨角製、石製、木製、鉄製品があり、紡茎は鉄製のもの以外の多くは木製品であると考えられている。ちなみにこの紡茎は撚りをかける時の回転軸であり、撚りがかかった糸を巻き付ける軸になることは民俗例から明らかである。古墳時代にいたり、実用的な鉄製紡錘に対し石製紡錘特に碧玉・滑石製のものは祭祀物では仮器として存在したとされている。そして、紡錘は麻生産との関係で関東・中部地方からの出土が多く、関西では絹生産が多いため紡錘の出土が少ないといわれている。

では、本遺跡出土の紡錘車を見てみると、形態は広面側に幅は狭いが明瞭な端面を作り出し、断面はややくびれた逆台形のものである。材質は滑石製で明緑灰色を呈す。そして、特徴的なのは線刻が描かれているということである。その線刻は広面・狭面とも軸孔から放射状に描かれ、さらに広面・狭面端部近くに円に沿った線刻が、側面にも同様に円に沿って数条の線刻が描かれているものであった。広面の方がより丁寧に描かれ、より装飾性をもっているように見える。

紡錘車は前述のとおり実用の道具であることから、当然使用における痕跡が残る可能性が考えられる。本遺跡出土紡錘車を観察してみると、広面・狭面・端面・軸孔には明瞭な使用痕跡は認められない。強いていえば広面側端面及び狭面端部に若干の摩耗が認められるだけである。また、広面・狭面とも若干の細かい傷が見えるが、糸を巻き取ることによってできた擦痕とは考えにくく、特に広面は民俗例等から糸を巻き取る側として理解されているので擦痕が残る可能性があるが、本例はむしろ明瞭な線刻を残し使用痕跡を残していない。ただし、巻き取るものが糸ということで痕跡が残りにくいということもあり得るが。側面の摩耗も指で回転させる際に擦れて摩耗したというよりは滑石という比較的軟らかい材質に起因するように思われる。また、軸孔についても紡茎を装着する際と引き抜く際につくと思われる擦れの痕跡は認められない。以上観察上からは実用品という面が認められないことになる。では、もう一方の祭祀の仮器としての面を考えれば、線刻という装飾性を重視することで、丁寧な線刻がなされていることから仮器としての性格が強いといわざるを得ない状況である。しかし、一方で一般的に広面を上に使用することから広面側の線刻が丁寧に描かれているとすれば、実用の際、目に見える部分に注意を払ったとも考えられる。

鈴木孝之氏は、『北島遺跡』Ⅳの報告書（引用・参考文献参照）の中で北島遺跡出土の線刻をもつ紡錘車を検討されている。その中で氏は、北島遺跡の紡錘車例は、線刻を施す際にもそれを見る際にもおそらく狭面を上にして見たであろうとしている。また、糸巻き取りの面がどちらであったかについては、糸を巻き取りはじめる段階で広面の方が糸に触れる面積が広くなるということでたくさん糸を巻き取れるというが、それにはさほど意味がなく原則的に糸を巻き取るだけのことで軸棒に多く巻き取れば問題ないとし、広面・狭面の面積の差が巻き取る糸の量に影響を及ぼしたとは思われないと論じている。また、祭祀等により、本来の目的以外の意味をもたせ、広面・狭面を意図的に使用または使用しない場合は、特定の面のみ使用されたことになるとも論じている。このことは本遺跡紡錘車例にも言えることで、線刻は本来の目的すなわち実用以外の意図が反映しているとも言える。ただいずれにしても、線刻を描

くことによって何らかの意味を持たせたことは間違いないはずであるが、これ以上のことは推測の域を脱し得ない状況である。

以上簡単ではあるが、線刻紡錘車・須恵器転用硯という特殊遺物を挙げて考えるところをまとめてみたが、今回は限られた少ない資料の検討で類例資料との比較・検討等が欠落している。また、まだまだ勉強不足という感も拭えないという状況である。今後機会があれば、類例を集め、さらに検討し、再考を試みたいと考える。

引用・参考文献

『熊谷市史』前編　熊谷市　1963

『新編　埼玉県史』資料編１　1980

『新編　埼玉県史』資料編２　1982

『新編　埼玉県史』資料編３　1984

大里郡市文化財担当者会「大里地域の遺跡Ⅰ」『埼玉考古』第29号　埼玉考古学会　1992

小久保徹他『三尻天王・三尻林(１)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983

高山清司「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成』４　埼玉考古学会　1976

金子正之「横間栗遺跡(２次)」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和62年度　埼玉県教育委員会　1990

金子正之「熊谷市横間栗遺跡の調査(第２次)」『第29回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他　1988

木戸春夫『根絡・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995

中島　宏他『池守・池上』埼玉県教育委員会　1984

鈴木孝之『北島遺跡』Ⅳ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998

吉田　稔他『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991

滝瀬芳之他『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1993

田中広明『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1992

磯崎　一『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989

大屋道則『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994

田部井功『弥藤吾新田遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第29集　埼玉県遺跡調査会　1976

寺社下博他『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』熊谷市教育委員会　1979

寺社下博他『天神遺跡』熊谷市教育委員会　1988
寺社下博『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』熊谷市教育委員会　1982
滝瀬芳之『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990
増田逸朗他『横塚山古墳』埼玉県遺跡調査会　1971
山川守男『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995
寺社下博『中条遺跡群』熊谷市教育委員会　1984
寺社下博「三尻中学校遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度　埼玉県教育委員会　1982
寺社下博『中条遺跡群・中島遺跡』熊谷市教育委員会　1980
川口　潤『光屋敷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第82集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989
金子正之『三尻遺跡群　黒沢館・樋ノ上遺跡』熊谷市教育委員会　1985
小川良祐他『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986
坂野和信他『樋の上／皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998
金子正之『三尻遺跡群　上辻・下辻遺跡』熊谷市教育委員会　1982
金子正之『三尻遺跡群　上辻・下辻遺跡』熊谷市教育委員会　1984
中村倉司『下辻遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1987
川口　潤『本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989
寺社下博『めづか』熊谷市教育委員会　1983
利根川章彦他『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第９集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982
中島洋一『酒巻古墳群』行田市文化財調査報告書第20集　行田市教育委員会　1988
寺社下博「熊谷市籠原裏遺跡の調査」『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他　1987
『埼玉県古代寺院調査報告書』埼玉県県史編さん室　1982
吉野　健『西別府廃寺(第２次)』熊谷市教育委員会　1994
大場磐雄・小沢國平「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』第338号　1963
富田和夫『在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第220集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998
浅野晴樹『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989
中村倉司『北島遺跡』Ⅱ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989

大谷　徹『北島遺跡』Ⅲ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
『埼玉の館城跡』埼玉県教育委員会　1968
『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会　1988
『中世の熊谷の武士たち』熊谷市立図書館　1998
坂野和信・富田和夫「飛鳥時代の関東と畿内－北関東における７世紀の土器様相－」『国際古代史シンポジウム　イン　矢吹『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会　1996
鶴間正昭「関東の７世紀の土器」『古代の土器研究会第５回シンポジウム　古代の土器研究　律令的土器様式の西・東５　７世紀の土器－』古代の土器研究会　1997
坂野和信「和泉式土器の成立について－序論－」『土曜考古』第16号　土曜考古学研究会　1991
大里郡市文化財担当者会「大里地域の遺跡Ⅱ」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会　1993
角山幸洋「織物」『古墳時代の研究』５生産と流通Ⅱ　石野博信他編　雄山閣　1991
『木器集成図録』近畿原始編　奈良国立文化財研究所　史料第36冊　1993
立石盛詞他『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
昼間孝志他『新屋敷遺跡Ｄ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998

写 真 図 版

図版 1

前中西遺跡全景（西から）

前中西遺跡全景（東から）

図版 2

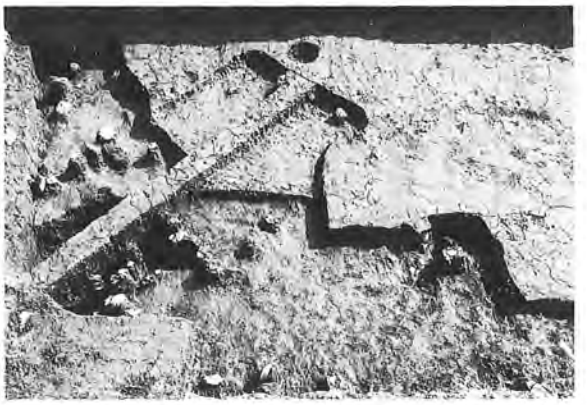
第 1 号竪穴遺構、第 1 号土坑

第 1 号竪穴遺構遺物出土状況

第 2 ～ 4 号竪穴遺構、第 4・5 号土坑、第23号ピット

第 4 号竪穴遺構遺物出土状況

第 3・4 号竪穴遺構遺物出土状況



第 2 ～ 4 号竪穴遺構、第 4・5 号土坑遺物出土状況

第 2 号竪穴遺構紡錘車出土状況

第 4 号竪穴遺構転用硯出土状況

第６号竪穴遺構、第６号土坑、第24号ピット

第１号溝跡、第１～３号ピット

第４～13号ピット

第２・３号土坑、第14～22号ピット

第11号ピット遺物出土状況

第16号ピット遺物出土状況

第25・26号ピット

第１号溝跡

図版 4

第 1 号溝跡遺物出土状況

第 1 号溝跡遺物出土状況

第 1 号溝跡遺物出土状況

第 1 号溝跡高坏出土状況

グリッド高坏出土状況

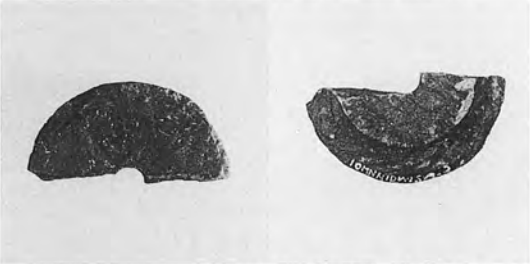
代表土層層序

発掘調査風景

調査区水没状況

第１号竪穴遺構　第12図－１

第１号竪穴遺構　第12図－３～５



第２号竪穴遺構　第12図－８

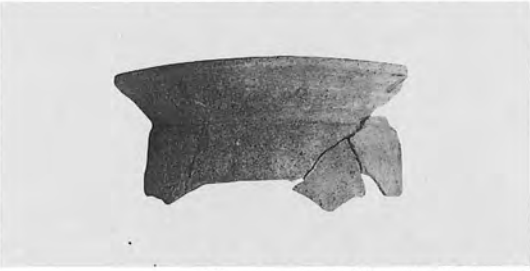
第４号竪穴遺構　第13図－５

第４号竪穴遺構　第13図－２

第４号竪穴遺構　第12図－16

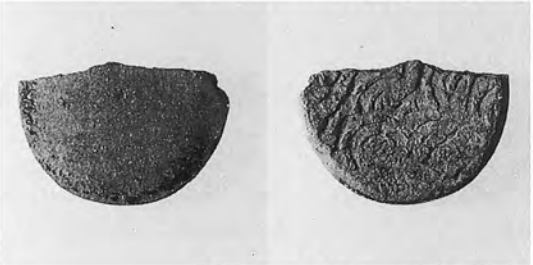
第４号竪穴遺構　第12図－18

第４号竪穴遺構　第12図－17



第４号竪穴遺構　第13図－12

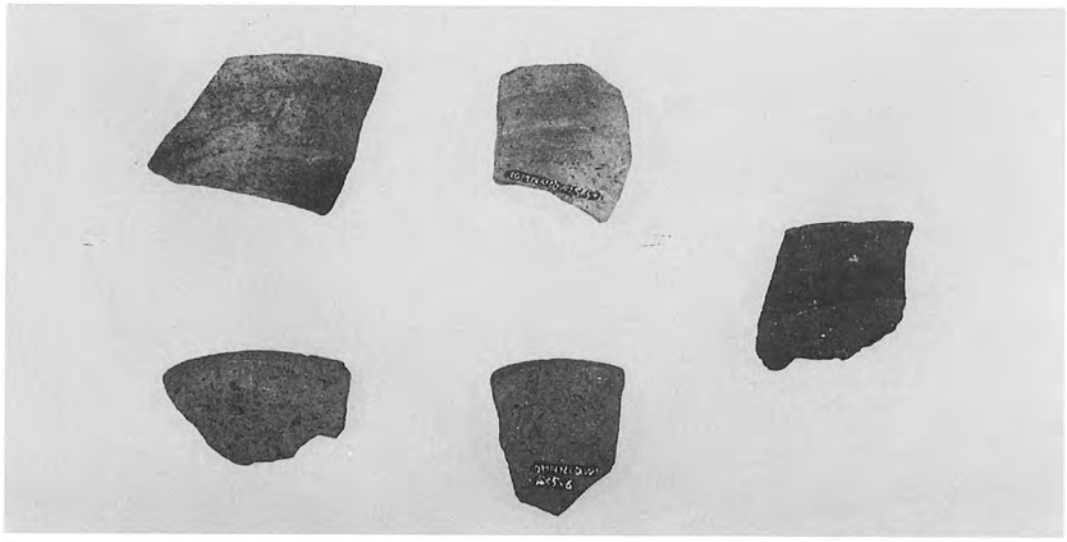
第４号竪穴遺構　第13図－10



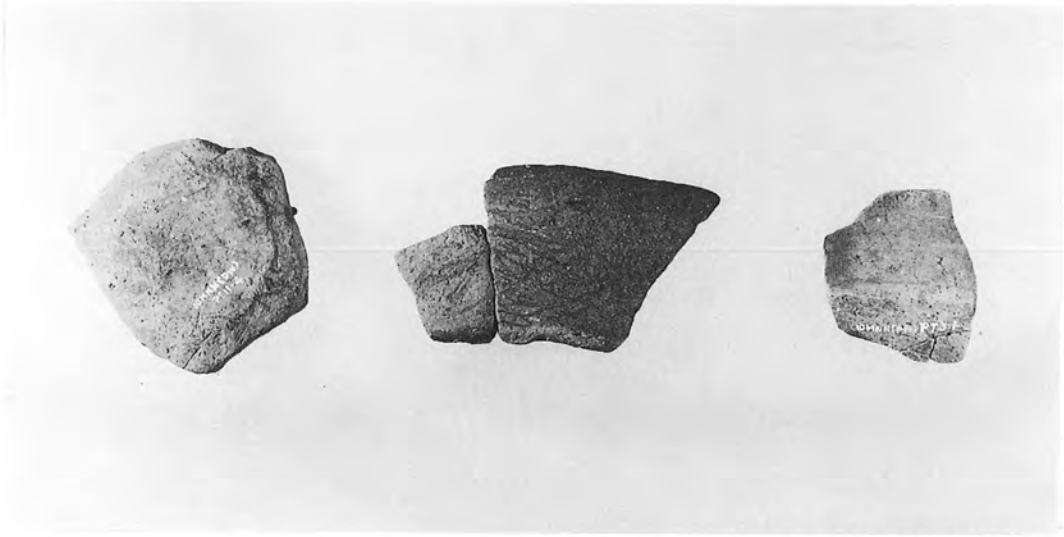
第４号竪穴遺構　第13図－14

第６号竪穴遺構　第13図－15

図版６



第４・６号土坑出土遺物



第11・16・18号ピット出土遺物

第１号溝跡　第21図－６

第１号溝跡　第21図－７

第１号溝跡　第21図－５

第１号溝跡　第21図－３

第１号溝跡　第21図－８

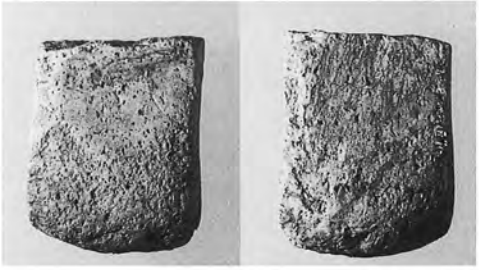
第１号溝跡　第21図－４

第１号溝跡　第22図－20

第１号溝跡　第21図－16

第１号溝跡　第22図－21

第１号溝跡　第22図－23



第１号溝跡　第23図－31

第１号溝跡　第21図－13

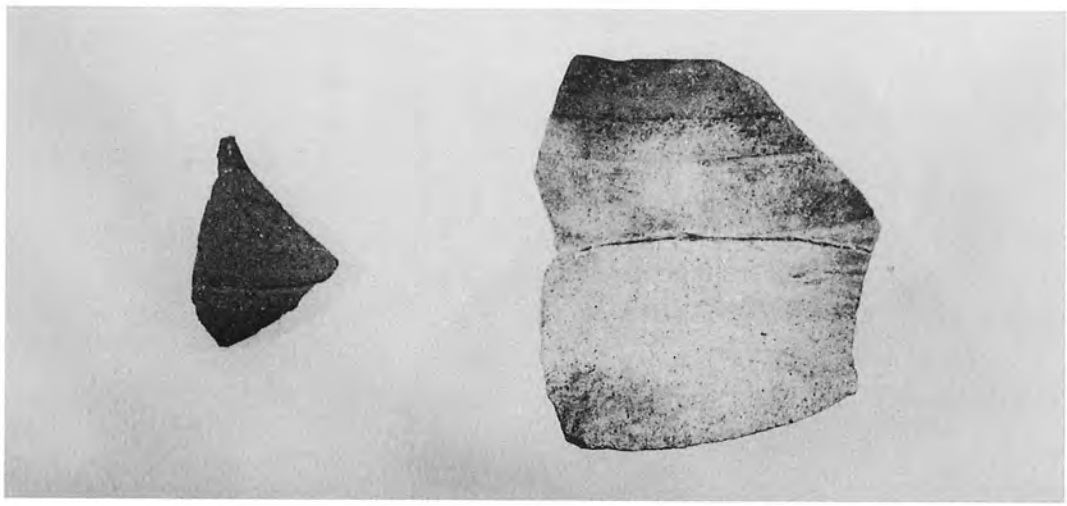
第１号溝跡　第22図－24

図版８

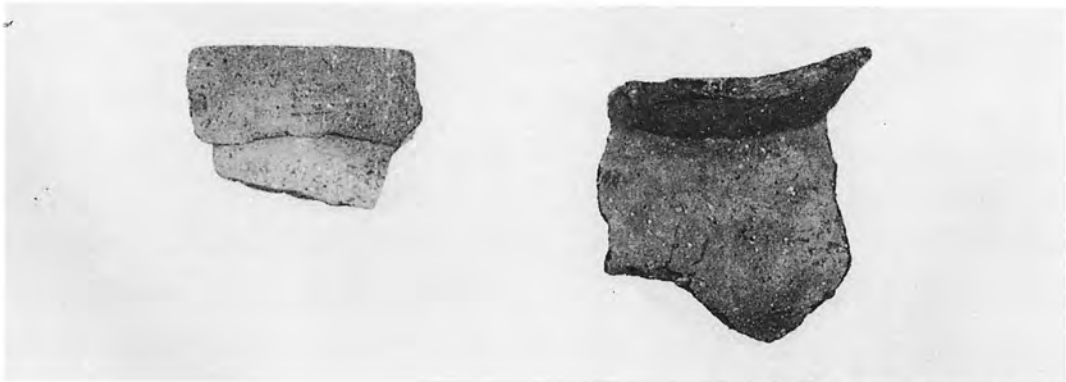
第１号溝跡　第22図－26（口縁部）

第１号溝跡　第22図－26（体部）

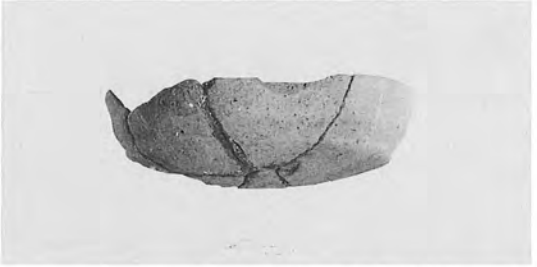
第１号溝跡　第22図－27



第１号溝跡　第22図－28、－30



第１号溝跡　第21図－11、－10

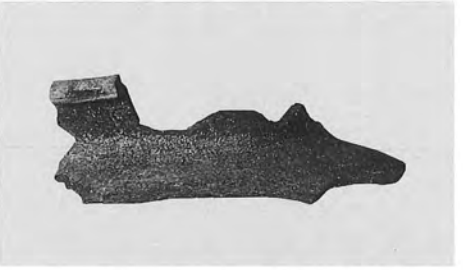


グリッド出土遺物　第24図－6

グリッド出土遺物　第24図－1

グリッド出土遺物　第24図－5

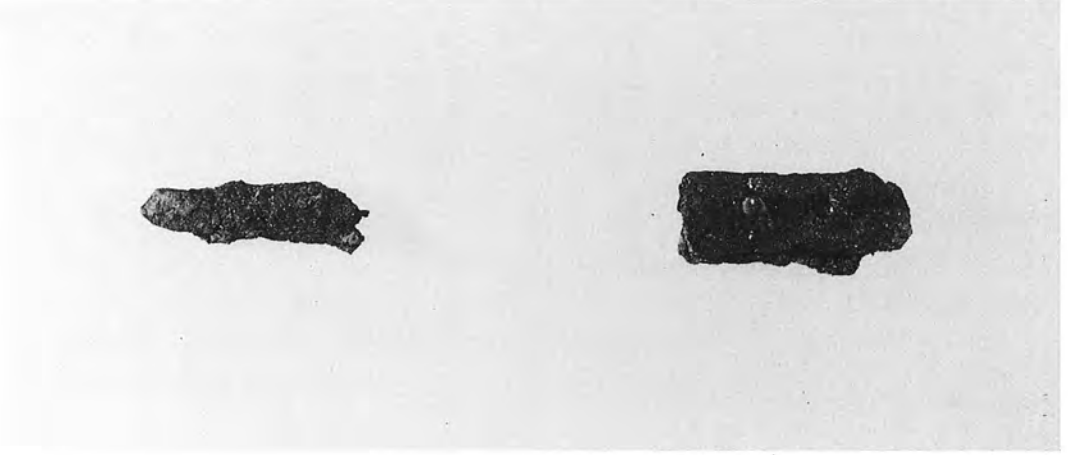
グリッド出土遺物　第24図－2



グリッド出土遺物　第24図－21

グリッド出土遺物　第24図－10

グリッド出土遺物　第24図－11



グリッド出土遺物　第25図－35、－36

報告書抄録

ふりがな	まえなかにしいせき
書名	前中西遺跡
副書名	熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉野　健
編集機関	埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会
所在地	〒360-8601　埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地1　TEL 0485-24-1111
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえなかにしいせき 前中西遺跡	さいたまけんくまがやしすえひろ 埼玉県熊谷市末広四丁目2501番7他	11202	107	36°8′35″	139°24′14″	19980817 ～19980916	110	共同住宅新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前中西遺跡	集落跡	古墳時代	遺物包含層 竪穴遺構　6基 土坑　6基 ピット　27基 溝跡　1条	土師器 須恵器 石製品 鉄製品	線刻紡錘車出土

熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書
前中西遺跡
平成11年３月31日発行
発　行／埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会
印　刷／株式会社　博　文　社

さくらのまち“熊谷”